
ネギまに生まれし神祖の吸血鬼

ロリコンによるロリコン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギまに生まれし神祖の吸血鬼

【Nコード】

N2330U

【作者名】

ロリコンによるロリコン

【あらすじ】

死にかけて少年がよくわからない存在に意識を拉致られ一つだけ願いを叶えてもらいネギまの世界に。
少年はなにをなしてどう生きるのか。

プロローグ（前書き）

読んでくれるとうれしいです。
ぐだぐだですがスルーでお願いします（笑）。

プロローグ

ここは・・・？

「ようこそ。私の部屋に。」

あなたの部屋？

「ああ、私の部屋だ。」

あなたは誰？

「うん？私か？私はお前たちでいうよくわからない存在だな。」

よくわからない存在？

「ああ、私自身もわからない。」

そうなんだ。

それでなぜ僕はあなたの部屋に？

「私がお前を呼んだからだな。」

何のために？

「うーん・・・暇つぶし。」

暇つぶし？

「そう、暇つぶしだ。」

それで、どうするの？

「そうだな・・・お前はここに来る前のこと覚えてるか？」

ここに来る前・・・

僕は・・・

どうしたんだっけ？

「やっぱり忘れてるか・・・」

忘れてる？

「仕方ない・・・ちょっとこっちに來い。」

何するんですか？

「うん？ああ、お前の記憶を引きずり出すから少し痛いぞ。」

へっ？

うあああああ

くっ痛いイタイイタイー

はあはあっ・・・

「すまん。だが思い出しただろ？」

僕は・・・死んだんだね。

「いや違う。正確にはまだ身体は生きてる。」

ならなんで僕はここにいるの？

「それは最初に言ったが？」

僕を返してくれたりは？

「ないな。だいたい戻ったとしても二度と身体が動くことはないぞ。」

なぜ？

「体中の神経が完全に壊れているからな。」

そっか・・・

ならこれから僕はどうしたらいいの？

「そうだな・・・お前には生き返ってもらおうかな。」

そんな事出来るの！？

「んっ？私にできないことは自害ぐらいだぞ。」

・・・それは誰でもしたくないことなんじゃ・・・

「いやいや、したくても出来ないんだ。」

なんでしたいの？

「それは飽きたからだ。退屈はすべてを殺す。」

・
・
・
・
・

「それはいいとしてお前の希望の世界はあるか？」

・
・
・魔法がある世界がいい。

「すぐに死ぬぞ。」

それでも行ってみたい。

「・・・ならここに呼んだのも私だし好きな力を一つだけやろう。」

僕が思う神祖の吸血鬼にしてほしい。

「神祖？お前神になりたいのか？」

いや違う僕は真祖を超える真祖になりたいんだ。

「ふーん、まあいいだろう。」

それで・・・いいのか。

「うん？構わないよ。ただ容姿は決めさせてもらうけどな。」

そこまでは言わないよ

「私は基本見守るだけだからこれ以上は関わらないから。」

行く世界の名前だけ教えて欲しいんだけど。

「それぐらいなら構わないよ。えっとたしかねぎまだったかな。」

それって漫画じゃないんですか？

「うーん基本小説とか漫画とかは実在するよ。ただ並行世界だけど。」

なんですか・・・それ

「気にしないほうがいいんじゃないかな？」

そうですね。

「さてそろそろ君を転生させようか。」

わかりました。

「それじゃあ・・・ほいっと」

身体が・・・透けていく。

「じゃったのましてくれよ。」

ああ、ありがとうな

プロローグ（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

主人公設定です。(前書き)

チートなのか？

微妙です。

主人公設定です。

（主人公設定）

名前…新堂 真央

性別…男

年齢…十八

二つ名…「真祖を超える神祖」「舞姫」「なにあのネギは？」「俺はあのひとの攻撃で目覚めたんだ」

「殺さぬ慈愛」「幼女神降臨」

発動キー…ウ・クト・ウ・シュルト

容姿初期…百三十cmぐらいの身長で髪は腰にかかるぐらい長く、その髪は綺麗な蒼色で目も同じく蒼色

でとても愛らしい顔をしている。道を歩けば十人が十人振り向くほど。

性格…好奇心が強い、死を嫌い不殺を心に誓う、誰にでも基本優しい、温厚でほんわかしている。

しかし、真面目な時は真剣にそれを行う

ステータス

筋力…S

耐久力…S

知力…S

敏捷…EX

幸運…B

魔力…EX

気…EX

宝具…EX

固有スキル

男の娘 EX

なぜか決めてもらった容姿が男の娘
しかもかなり可愛い

年齢変化…A

身体年齢を5歳から25まで変えることができる

性転換…A

なぜか変えることができる

声帯模写…A

どんな声でも真似できる

蝙蝠化・霧化…A

吸血鬼と同じくすることができる

眷属化…S

意識して眷属にしようとして噛むと真祖の吸血鬼にできる

NEW!! 魂の契約

豊と契約したことにより半分神となった。
神力が身に着いた。

宝具…EX

その身自体が宝具となっている
あとネギを無限に生み出せる

状況確認は大事です。（前書き）

今はペースが速いですけど少ししたら落ちます。

なるべくはやく投稿したいと思います。

楽しんでくれるとうれしいです。

状況確認は大事です。

目が覚めるとそこは森の中だった。

なぜこんなとこに出たのかはわからないが・・・
よくわからない存在のせいだろう。

ここがネギまの世界のどこにあたるのかはまだわからないが、
たぶん魔法世界の方ではないだろうか。

だってこんなに大きな木はないと思うから。
しかもたくさん。

とりあえず自分の格好を確認しなければならぬよな。
どこかに鏡的なものはないかな。

探している間に服の確認だ。

青い服に身を包まれていて靴はブーツ。
その上にローブを着ていた。

うん、よくわからない存在は趣味が結構いいな。
自分の姿がわからないから似合っているかはわからないけどね。

そうこうしている内に池というか湖みたいところに出た。

水面を覗き込んでみると・・・
そこには愛らしい美少女が居た。

一目惚れしてしまうぐらい愛らしい美少女が・・・
って、これっ僕!?

僕が驚くと同時に水面に映る美少女?も驚く。

ほっぺを引っ張ってみる。

美少女？も引っ張る。

これは・・・。。。

うん、認めよう。

この美少女は僕なんだね。

でも望みはまだある！

そう、息子の存在さえあればいいんだ！

確認したが・・・

どうやら大丈夫なようだ。

息子は僕に元気な姿を見せてくれた。

よかった・・・ほんとによかった。

姿は勝手に決めてくれと言ったから仕方ないとして・・・
身体能力はどうなっているんだろう？

そう思って近くにあった大い石を掴んでみて力を入れ持ち上げよう
とした。

すると自分の体ぐらいある石が簡単に持ち上がった。

感覚的には小さな石を持ち上げたくらい。

はんばねえ・・・。

よくわからない存在は願いを叶えてくれたようでうれしい。
そのあとも少しはしゃいでしまったが。

仕方ないよね。

そういえば僕って蝙蝠とか霧になれるのかな？
やっぱり吸血鬼と言えばこれだね。

僕の体の一部が蝙蝠になる。

そう考えた瞬間、体の一部が蝙蝠になった。
どうやら想像するだけでいいらしい。

身体能力とかはもういいとして・・・魔力や気ってちゃんとあるのかな？

よく本とかには自分の中にある力の本流とかいうような説明がしてあるしそれでできるかな？
ものは試しだやってみるか。

目を閉じて、心を落ち着かせて、自然を感じ、自分の中にある何かを感じる・・・。

すると、体の奥底に二つの何かを感じた。

これが・・・魔力と気かな？

意外とわかりやすいな。

濃厚な自然を感じる方が魔力で、元気の塊のような感じがするのが気かな。

そんな気がする。

二つがわかったのはいいんだが・・・

使い方がわからないから宝の持ち腐れだな。

そうだなとりあえず体に魔力を纏わせてみるといいかな。
手から足に足から手にそれを繰り返すとなんか手に集めてみたくな
った。

あれだ、灼熱ゴッドフィンガー的なことがしたいんだ。

考えればそく行動。

手に魔力を集めてみる。

すると手から魔力が放出され何かを形作った。

なんだろう・・・？

それは・・・

それは・・・ネギだった・・・。

Why?なぜ？

ネギってなんなの！？

確かにここはネギまの世界だけどき。

期待さしておいてネギって・・・。

ひどくないか・・・よくわからない存在・・・。

そのまま落ち込んだまま回復するのに時間がかかった。

状況確認は大事です。（後書き）

読んでくれてありがとうございます。

ネギの使い方と魔法（前書き）

眠いけど書きました。

ネギの使い方と魔法

あのネギ事件から数時間後・・・

だいぶ精神的ショックから回復した。

あれはギャグに使える。

ほかに使い道はあるのだろうか？

あのネギが何に使えるか調べてみることにしよう。

叩いてみる

異常に硬かった、石が壊せた。

嗅いでみる

鼻がツーンとして涙が少し出た

投げてみる

周りの木に当たって砕けた・・・ネギが。

周りにネギの匂いが広がった。

涙が止まらない。

食べてみる

普通にネギの辛い味がした。

軽く涙になった。

焼いてみる

香ばしい匂いがした。

美味しくいただきました。

どうやらこのネギは完全に実体化してるみたいだ。

魔力が続く限り望めば望むほど出てくる。

それに僕の体に触れてる時は岩をも砕く硬さになる。

しかし、ひとたび体を離れると豆腐のごとく柔らかくなる。

焼いた場合は不思議と普通のネギと同じくらいの硬さになった。

というか調理したら普通のネギになった。

これは買い物に行かなくて楽だ。

まあ、いつまでもネギを調べているわけにもいかないな。

とりあえず町を探すかな。

僕・・・吸血鬼だとばれないよね？

ちよつと不安だな。

とりあえず第一目標は町を見つけるでいいかな。

どっちに行こうかな？

うーん、よし右にまっすぐ行こう。

何かあるはずだ。

そう思っていたのが四日前。

いまだに街は見えない。

さすがに疲れてきた。

精神的にだけど。

ああ早くどこでもいいから着かないかな。

それからさらに四日後。

やっと街が見えてきた。

行き交う人に聞くとあの街はアリアドネーらしい。

魔法を学ぶにはいいかもしれない。

入国したよ。

というわけで聞いてみることにした。

「ねえ？ そのお姉さん魔法を学びたいんだけど・・・
どうしたらいいかな？」

こういう時は聞いてみるのが一番さ。

「あら、魔法を学びたいの？」

「それならアリアドネーにある大図書館で私が教えてあげるわ。」

「初めて会ったのにそんなことしてもらってもいいんですか？」

「んっ？見たところ魔力は十分にあるみたいだし・・・なにより可愛いから。」

「・・・お姉さん、僕は男ですよ。」

「えっ・・・なんてこと・・・こんなに可愛いのに・・・男ですって・・・。」

「それはいいとして、僕魔法を学べるんですか？」

「うっ、うん。構わないわ。」

「やったー魔法を学べるんだー。」

「（なにこの生き物・・・超かわいい・・・）ええ、今すぐでも構わないわ。」

「本当？なら今すぐ行く！」

「そう？なら行きましょうか。」

それから・・・一週間後

「まさか・・・一週間で魔法のほとんどをマスターするなんて・・・。」

「うん、楽しかったよ？」

「そう・・・それはよかったわ（私は四年もかかったのに・・・）。」

「今までありがとう、僕また旅に出るよ。」

「ええ、そうしたらいいわ。」

「お姉さんありがとうございました。」

「私はメイラよ。」

「わかった、メイラさんありがとうっ！」

「元気だね。」

「メイラさんもね。」

そうして僕は魔法を習得した。

ネギの使い方と魔法（後書き）

どうでしたか？

魔法球作成（前書き）

寝不足です。

魔法球の作成は作者の妄想で出来ています。

気にせず読んでください。

魔法球作成

魔法を習って百年がたった。

その間はずっと旅をしていた。

村を救ったり、孤児を拾って育てたり、武術を習ったり、少女の吸血鬼に襲われて逃げたり、時々はあるあるながら迫ってくる中年男性を殴り飛ばしたり、国を作ったり、竜と遊んだり、上位精霊とかいう女性型をした者たちとお茶会をしたり、時々セクハラしてくる青年を殴ったり、魔獣に餌付けをしたり、本を書いたりしていた。

思い返すと百年でいろいろな体験をしたなあ・・・。
どれも昨日のように思う。

今は一つの場所に留まり生活をしているけどね・・・。
魔法世界のどこかの森に住んでいる。

ここは人外の者しか来れないような場所でも静かだ。
と言っても、よく人語を解する魔獣とか竜とか精霊とかが訪れるので淋しくはない。

ここに来てからすでに一年がたつ。

意外と住みやすくて時間をついつい忘れてしまう。

というか・・・ここってネギまの世界だったんだよね・・・。

普通に暮らしてたから忘れてたけど。

今がどの時期なのかわからない。

時々精霊さんのお茶会で風の精霊さんが人間たちが何かを始めていると言っていたが・・・

もしかして大きな戦争でも起こるかな？

そういえば原作でもなんかあったような・・・。

あんま読んでなかったしな・・・。

まっ、もう少ししたらここを出るかな。

そうして回想とかしてから一週間がたった。

僕がここを出ると魔獣やら竜やら精霊たちに言うに僕に着いて来た
いそうだ。

だけどどうやっても連れて行く事は出来ないんだけど・・・。

そのことをみんなに話すと精霊さんが人間たちが作る魔法球とか言
う物を作ってはと提案してきた。

だけど僕は作り方を知らないと伝えると、精霊たちが知ってるそう
なので教えてもらいながら作る事になった。

材料はここに住んでた魔獣と竜から提供してもらった。

そして作る事になった。

作り方は案外簡単だった。

火で溶かした材料をガラス球みたいにして作った台に固定する。

そこに僕が魔力を満ちるまで注ぎ込む。

その時に精霊さんたちが歌を歌いながら綺麗な光を放つ魔方陣を魔

法球の原型に刻み込んでいった。

その周りで竜が楽しそうに踊り、魔獣が夢心地に寝ていた。そして、魔力が球に満ちた。

すると魔法球が完成した。

大きさは僕より大きい。

つまり、直径百五十ぐらいはある。

だが中身は空っぽだ。

精霊さんの話によれば僕の魔力の質と全精霊さんの上級だけが集まって手伝った事と竜たちが踊っていたことである意味超巨大な増幅効果が表れたらしい。

本当ならばできた魔法球の半分の大きさの予定だったらしい。

これならばこの森すべてを内包できるとのこと。

せっかくなのでみんなに協力してもらい森をすべて魔法球に入れた。持ち運びは精霊さんが小さくしてくれたので問題なかった。

魔法球を作ってから僕はまた旅をし始めた。

最初はヘラス帝国にでも行こうかな？

魔法球作成（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

戦場にて主人公は敵を刺す(前書き)

オブラートに包んだ下ネタ満載です。

しかもかなりぐだぐだしています。

それでもよければ見てやって下さい。

戦場にて主人公は敵を刺す

また僕は魔法世界を旅してまわった。

精霊さんたちが言っていたのはどうやら大戦を仕掛けようとしていた連合のことらしい。

なんで戦争なんてするかな・・・。

いろいろと見て周ったがやはり孤児が多い。

見つけては拾って僕が作った国に送り込んでいるが一向に減らない。どうやら戦争が原因みたいだ。

なら原因を僕が潰してやろう。

そう考えた。

安直だが、動かぬ事には何もはじまらないからね。

思い立てばそく行動。

と言うことで今僕は戦上にいます。

まだ初めてはいない様なので好都合です。

どちらに着くか迷いますが・・・やはりここは戦争を仕掛けられたヘラス帝国でしょう。

「私の名はシンドウ・マオ！ヘラス帝国に助太刀いたす！」

と大きな声で叫んだ。

するとヘラス帝国の將軍っポイ人がなんか言ってきた。

「気持ちはあるがたいが子供は戦場には来るな！」

まあ、もつともなご意見で。

しかし、僕も引くわけはないので。

「それはやってみないとわからないでしょう！」

変な顔をして將軍。

「好きにするがいい！！だがどうなっても知らんぞ！！」

とても優しいことで・・・。

「了解！！」

やり取りが終わると戦争が始まった。

魔法の応酬から始まった。

そのうちに僕はネギを両手に装備した。

そして連合軍めがけて走り出した。

近くまで行くと兵士が攻撃してきた。

こっちのネギを見た瞬間微妙な顔をしたがそれ以外は鬼気迫る雰囲気を出していた。

だがそんなのは関係ない！！

僕がこの百年の間に研鑽した武術の一端を見るがいい。

僕は相手の後ろを取り岩をも砕くネギを突き刺した。

相手が戦闘不能になると新たな獲物に襲い掛かり的確にネギを急所に刺していった。

すると僕の周りに空間ができていった。

僕はそれを繰り返して一人の犠牲者も出すことなく敵を倒しきった。負傷者はヘラス帝国は軽傷が大量にいた。

連合軍は傷は全くないが一ヶ月は動けない者が半数を占めていた。

ヘラス帝国軍は僕の活躍を見ていろんな意味で渋い顔をしながら話しかけてきた。

「先ほどはすまなかった……。」

「いえいえ仕方ないですよ、こんな子供みたいななりをしているんですから。」

「……それはいいとして、なぜあのような攻撃を？」

「えっ、あれですか？」

「そうだなぜあのようなふざけた真似をしたんだ？」

「えーとですね……私はよく男性に襲われたりする事があったんですよ。」

「それは……」

「いつもいつも殴って済ませてたんですけど、部屋に侵入して来た

奴がいますて。」

「それで？」

「それにキレて怒った時にこのネギを出したんですよ。」

「そしたら（そんな物でなにができるんだ？）的なことを言ってきたのでつい蹴り飛ばして刺したところ、ちょうどそこに刺さったんですよ。」

「……………」

「そして私が手を放したらネギが碎けて汁を刺したところにまき散らしたんですよ。」

「それは……（きついなそれは）」

「それからですね……私が攻撃手段の一つにこのネギを使いだしたのは。」

「（ある意味最強の武器だ）」

「だから別にふざけてるわけじゃないんです。」

「（いや、初見では馬鹿にしてるようにしか見えない。）」

「これが私の中で唯一簡単な無力化の方法なんです。」

「そうか……（俺はこいつを敵にまわしたくないな唯一の無力化がそんな攻撃だなんて……せっかく可愛いのに勿体無い）」

「こんなものなんですけど・・・他になんかありますか？」

「いや、いまは無いが少しの間ここに留まってくれないか？」

「別にかまいませんよ。」

「たぶん王が礼として何かを下さるだろうからな。」

べつにいらないんだけどな・・・

まあ、国のトップを見えるのも一つの体験か。

戦場にて主人公は敵を刺す（後書き）

読んでくれてありがとう。

まさかの告白？（前書き）

まさかのヒトがヒロイン？

さあ、どうでしょう？

まさかの告白？

僕は連合軍やヘラス帝国に死人を出すことなく戦争を終わらす事に成功した。

しかし、僕は軍のある程度の地位にいる人には微妙な反応をされた。

まあ、あんなふざけた事をくそ真面目にやりきったんだからそんな反応をされても仕方ない。

とりあえずキャンプで負傷者に軽い治療をしたりして過ごしていた。

そんな事しているとヘラス帝国の王が会いたいと言っていると、ヘラス帝国のあの将軍が伝えてきた。

断る理由もないので会ってみる事にした。

将軍に連れられて入国。

帝国に入国すると様々なヒトから歓迎された。

なんでも全く死人が出ずに家族が帰って来るからとの事。

だけど僕に会う時に戦場にいたヒト達だけは体のある部分を押さえて話しかけてきた。

・・・敵にならない限りそんな事しないのに。

色々と入国に時間がかかって城にたどり着く事が出来たのは数時間経ってからだった。

やっとたどり着いたらあの將軍の部下が王がいるところまで案内してくれた。

なんかいっぱいいるんですけどヒトが。

右にズラリ、左にズラリ、前には王様とその家族が。

なにこの圧迫感。

そんなことを考えたりしていると王様らしきヒトが喋り掛けてきた。

「お主の名は？」

「私の名は新堂 真央、マオ・シンドウです。」

「わかった。お主が今回の戦争で我らを手助けしたことに感謝する。」

「なにか欲しいものでもあれば言うがいい。」

「それなら・・・テオドラ皇女殿下が欲しいです。」

「はっ？」

「わらわ!？」

「貴様!舐めているのか!そんなことが叶えられるわけがないだろ
う!」

「・・・ダメですか？」

「(おうふ、なんじゃ・・・この感覚は?) 黙っておれ!・・・お

ほん、なぜテオドラなんだ？」

「陛下！」

「いいから黙っておらぬか！よいと言うまで口を開くな！」

「わっ、わかりました。」

「それは・・・」

「それは？」

「（ゴクリッ）」

「可愛いからです。」

「はっ？（可愛い？確かに私の娘は可愛いが・・・）」

「わらわは可愛いのか？」

「ええ、私のストライクです。」

「・・・おっ、お主は女ではないか。」

「（そうじゃのう・・・告白はうれしいんじゃないかな）」

「いえ、私は男ですけど？」

「（はあ！？あれで男！？）そっそうなのか・・・だが娘が認めない限りやれん。」

「わらわはいいのじゃー!!」（むねがドキドキするのじゃ・・・／＼）

ざわざわがやがや
周りが少しざわつく。

「しかし、娘をそう簡単にやる事は出来ぬ。（娘が認めても娘は絶対に渡さんぞー!!）」

「それは知ってます。だから条件を出してください。」

「私が出すわけにはいかん・・・、そうじゃテオドラよお前が出すがいい。（お願いだ超難しいのだして!）」

「わらわは・・・そうじゃ! 戦争を早く終わらせれるよう手伝ってくれぬかの?（これなら・・・）」

「わかりました。約束ですよ王様?」

「うっ、うむ。わかっておる。（くそーこれは確実に嫁に行ってしまう・・・長引かせようか? しかし、そんなことをすれば娘に嫌われてしまう・・・民にも迷惑が・・・どうすればいいんだー!）」

「話が終わったら、わらわの部屋に来るのじゃ。」

「わかりました。それでは陛下失礼します。」

「うむ。（なぜじゃー娘よ男なんて部屋に入れるなーちくしょーー!）」

まさかの告白？（後書き）

読んでもらいうれしい限りです。

部屋に向かおう（前書き）

今回も短いです。

部屋に向かう

テオドラ side

わらわは困っておる。

なぜならば大勢の家臣とかの前で求婚されたからなのじゃ。
いままでは恋文とかなら貰ったことはあるのじゃが・・・

いつも父様に取り上げられて「娘を誑かすのはどこのどいつじゃー！ー！」とか言っただけでなくそんな色恋話とかにはならなかったのじゃ。

だが、今回はみなの前で父様に真剣な顔をして（＊真央は普段通りです）わらわが欲しいと言ったのじゃ。
わらわにとって初めてのことであったのじゃ。

つい「わらわはいいのじゃー！！」なんて言ってしまった。

しかし、あそこまで可愛いのに男なんてありえないのじゃ。
わらわは初めて見たときに見とれてしまったのじゃ。
たぶん・・・一目惚れじゃったのじゃ。

だから父様に条件を出されたときに絶対に彼の物になれる方法を選んだのじゃ。

あとから考えるとわらわは彼を部屋に呼んだんじゃ・・・
かなり恥ずかしいのじゃ／＼

早くこぬかのう・・・

マオside

やった！交渉は上手くいったよ。

いやーあそこまでトントン拍子に話が進むとは思ってもみなかったよ。

最初はヘラス帝国に恩でも売つとこうかな？

孤児を増やしたくないなあ・・・

そんな気持ちで行ったんだけど。

テオドラ見たら欲しくなっちゃった。

なんだろうこう胸をキュンツとさせられたんだよね。

そういえば昔、吸血鬼に追われた時もキュンツとしたなあ。

昔は全体的に弱かったけど今はネギという最強の食材を片手に戦場を無傷で走り回れるようになったから怖いものなんてなくなったんだよね。

思わず口から「テオドラ皇女殿下が欲しいです。」なんて出ちゃったぐらいだからね。

ああー絶対無理だーと思ったんだけど。

意外とテオドラは受け入れてた。

そのかわり王様はすごい顔をしていたけどね。

しかも最後にはテオドラから絶対に僕が死なない限り僕のものになる条件を出してきた。

これには驚いたよ。

だけど、王様の悲痛な顔が……。
やっぱ考えるのはやめておこう。

そういえば……僕はテオドラに部屋に来てくれと言われたんだっ
た。

どこに行けばいいのかな？

うーん……とりあえず侍女さんにでも聞こうかな？

おっ、ちょうどいいところに。

「すみませーん。」

「はい？　なんででしょうか？　（この娘私のタイプだわ。）」

「えーとですね。テオドラ様に部屋に来てくれと言われたんですけ
ど……どこかわからないんですよ。」

「私が案内しましょうか？　（ベッドまでなんてね。）」

「よろしくお願いします。ゾクッ（なんか悪寒が……）」

部屋に向かおう（後書き）

読んで下さりうれしいです。

騎士にならぬか？（前書き）

めっさ短いです。

騎士にならぬか？

「こちらがテオドラ様の部屋です。（ホントいいわぁ・・・これで男だったらしいのに・・・）」

「ありがと。（さっきからなんか背筋がぞくつとするんだよね・・・）」

こんこんっ

「なんじゃ？」

「お客様が来ました。」

「来たのかの！待っておった早く入るのじゃ！」

「それでは、私はここで失礼します。（テオドラ様があんなにはしやいで・・・じゅるりっ）」

「いえいえ、助かりました。（なんか目が怖いなぁ）」

「テオドラ様入ります。」

「うむ。よいのじゃ。」

がちやり

「ここに座るのじゃ。」

「ここですか？（うわー可愛らしい部屋だなあー）」

「早速じゃが・・・お主に頼みがあるのじゃ。（聞いてくれるかの？）」

「なんですか？」

「わらわの騎士になって欲しいのじゃが・・・ダメか？（涙目で見上げるんじゃったかのう？）」

「いいですよ。（うあーこんな頼みかたされたら断れないって・・・）」

「ホントか!?(母様―成功したのじゃー!!)」

「それでなにしたらいいんですか?」

「わらわの傍にいればいいのじゃ。(いつでも一緒じゃ)」

「そうですか・・・わかりましたテオドラ様。(早まったかな?)」

「むっ、わらわの事はテオと呼ぶのじゃ!」

「わかりましたテオ。」

「堅苦しい言葉づかいもいらぬのじゃ。(恥ずかしいけど・・・うれしいのじゃ)」

「わかったよ、これでいいかいテオ。(楽でいいな)」

「お主のことをマオと呼んでもいいかの?」

「べつにかまわないよ。」

「ならマオ、お主の事を聞きたいんじゃないやが？」

「うーん、あまり面白いことなんてないよ？」

「それでもいいのじゃ。」

「なら僕が魔法世界に来た時からでいいかな？」

「うむ、それでいいのじゃ。」

「あれは僕が・・・・・・・・・・・・・・・・」

そして時が経っていく。

騎士にならぬか？（後書き）

読んでくれてうれしいのですう。

赤き翼との邂逅（前書き）

やっ
ち
や
っ
た
ぜ。

赤き翼との邂逅

ーーーーナギside

俺はナギ・スプリングフィールド。今はグレートブリッジに来ている。

「千の雷!! っとこれでここは終わったな。」

「ナギ! ついてこい。」

「どうしたんだ、詠春。」

「気配を隠して来いよ。…見てみる。」

完全に気配を隠して柱から見る。

俺は見とれてしまった。そこでは青い髪をした蒼い瞳をした少女がネギを振り回していた。

なぜ旧世界の食材であるネギを持って戦場で戦っているのかは知らないが、その戦い? はあまりに完成された舞の様だった。

しかも、そいつの周りには死者は一人もいない。

ただ体にネギが刺さり、時どきピクピクと動いているだけだった。

「す、すげえなああるいみ……。戦ってみたぜ。」

「はあ!? なんでネギなんかで戦ってるんだ!? っていうかえぐっ!?!」

隣で詠春が何か言っていたが関係ない。

師匠は呆れて俺を見てたが、すげえワクワクする。

そしたらアルが、

「敵にしたら厄介ですね。まあ間違いなく帝国の「幼女神降臨!」でしょう。」

と、いつていた。

それに師匠が、

「アルよ・・・彼の者には「真祖を超える神祖」とか言うマシなものがあるのになぜそちらを強調して言うのじゃ?」

と言っていた。

「うん?どうやら、終わったようじゃな。」

視線を戻すと、そいつは立ち止まっていた。

美しい青い髪と蒼い瞳の似合うとてつもなく可愛い少女だった。

「いい女じゃねえか。性格もよさそうだ・・・戦い方はえぐいがな・・・。」

とかラカンがいつていた。すると一瞬、恐ろしいほどの悪寒を感じた。驚き見てみると

「出てきたらどうですか?そこのみなさん。」

気配、隠してたよなあ。俺達。

俺は冷や汗を流していた。

マオside

「出てきたらどうですか？そのみなさん。」

「あなた達は紅き翼ですか？」

そう問いかけるとアルが出てきた。

「ええ、私はアルビレオ・イマ、と申します。失礼ですがあなたは「幼女神降臨」と呼ばれるマオ・シンドウで間違いないですか？」

ああ、自己紹介が遅れた。

あとアルそれは言っではいけないことだよ？

「ああ、私の名前はマオ・シンドウで間違いないよあとテオの騎士もしている。（あとで刺す！）」

そういうとアルが警戒を強め後ろに引いた。
アルは顔を青くして一部を押さえていた。

「ということは、貴方はヘラス帝国についているのですか？（今・・限りなく刺される光景が頭に浮かびましたよ・・）」

「そうだよ、紅き翼のみなさん。で、退いてくれませんか？約二人なんか闘志燃やしてるみたいですけど。」

まあナギとラカンですしね。

「マオだっけ？俺はナギ・スプリングフィールドだ。戦ってくれ！」

「こら！ナギ！」

「あははは！いいですよ、勝てたら退いてくださいね。それと戦ってる間は赤き翼の皆さんは戦争に手を出さないで下さいね」

「後悔すんなよ？お前ら手え出すなよ！」

ははは、根は普通なのに・・・。

「それじゃ、遠慮なく行きますよ。」

さあ、どうくるかな？

来ても後ろを取って刺すだけですけど。

「なにっ！どこ行った！？」

「ナギ！後ろだ！」

詠春が言ってくれたが遅い。

ナギに私が持っていたネギが突き刺さった。

「うおおおおおおお！？」

ナギは悶絶しながら転がっていく。

ゼクトとラカンが腹を抱えて笑ってる。

詠春、アルは顔を青くして同情の目でナギを見るが、肩が震えてる。
我慢しなくてもいいのに…。

「クハハハハ、笑わせてもらったぜ？次は俺だ！」

ラカンが笑いながら躍り出た。

そして、ナギと同じように後ろを瞬時にとりネギを突き刺した。

「うほう！こんなもの・・・うはあっ！」

ラカンはなんか気色悪い声を出しながら逝った。

この時紅き翼のアル・ゼクト・詠春は心をつにして思っていた。
《コイツドSだ！》と。

「次は誰ですか？」

なんか詠春とか悟っちゃったような眼して。
ゼクトは：少し押さえながら下がっていく。

アルは引き攣った笑みを浮かべていた
ナギはまだ悶絶している。
ラカンは逝っちゃってる。

そうこうしている間に『グレードⅡブリッジ』は連合に侵略されて
いた。

犠牲者は奇跡的に出なかった。

重傷者は少し出たが・・・。

赤き翼との邂逅（後書き）

読んでくれてうれしいです。

グレードⅡブリッジでの後で（前書き）

今回も短い

グレードⅡブリッジでの後で

『グレードⅡブリッジ守護作戦』に参加して暫く。

それに参加した事により帝国からは『舞姫』『真祖を超える神祖』
new!! 『○○殺し』『幼女神降臨』、

連合からは『なにあのネギは?』『俺はあのひとの攻撃で目覚めたんだ』『殺さぬ慈愛』『幼女神降臨』などの二つ名を付けられる事になってしまった……。

帝国と連合で被ったのがあるけど……

しかも今有名な人物の二つ名特集っていう雑誌で魔法世界はもちろん旧世界まで広がっていた。

二つ名なんていらぬのに……。

鬱だ、死にたい……もしくは引き籠りたい。

思考回路が危なくなってきた様な気がしないでもないが、それはまあ、置いておいて、何でこんなに二つ名がつくかな?

赤き翼みたいなカッコいいのならまだしも……

しかも、僕の場合はこれ全部がイコールで僕に繋がるし。

それと、二つぐらいはマゾとロリコンがいるよね。

だいたい僕は男なのになんでこんな二つ名ばかりつくかな?

一番いいのは『真祖を超える真祖』だけだよ。

それはこの際我慢しておこう。

うーんと最近思い出したけど、今は原作で言えばガトウ達が仲間になった後、ナギ達が『完全なる世界』について初めて知るところかな？

そこまで読み込んでないからよくわからないなあ。
いつも立ち読みだったから跳んでるし。

別に赤き翼自体にはそこまで興味ないしねえ。

だいたい戦争の時は僕が出ることで両軍の死者はいまだにいない。
ただ赤き翼によってたくさんの方傷者が出ている。

しかし、今回も死人は奇跡的にいない。

死人を出さないために僕は戦ってるんだしね。

死者を出さぬ戦争こそ連合にとってはきついだろうけどね。

給料は一応くれている。

前回の時はもらえなかったけど。

貰ったお金はすべて孤児院に寄付している。

僕ができる最高の偽善だ。

そういえばテオドラが今度連合の戦争を終わらせようとしている連中に会おうとしている。

誰なのかな？

そんな話あったっけ？

あーあ、戦争早く終わらないかな？

まあ、終わらすために会いに行くんだけどね。
何事もなく終わればいいんだけど・・・

グレードⅡブリッジでの後で（後書き）

読んでいただきうれしかぎりです。

夜の迷宮にて（前書き）

アーウェルンクスが軽く壊れてる・・・

夜の迷宮にて

マオside

ようやく会いに行く時がきたみたい。

「テオドラが僕に着いて来て欲しいのじゃ」、と言ってきたんだ。

まあ、テオドラの騎士みたいなもんなんだから着いてくるなと言っ
てもついていくけど。

マオend

テオドラside

今日は連合のアリカ姫とかいう者に会うのじゃ。

もちろんマオは連れて行くのじゃ。

会う場所は飛行艇での予定なのじゃが・・・

どうやら場所を変えたいと言っているとわらわの国の兵士に伝言し
てきたみたいなのじゃ。

テオドラend

テオドラから場所が変更されたと言われた。

場所は《夜の迷宮》らしい。
ノクティス・ラビリンス

罨の匂いがプンプンする。

だけどテオドラは気にせず行くんだろうなあ。
はあ

「なにをしておるのじゃ？早く行くのじゃ！」

「なんか怪しくないか？」

「なにがじゃ？」

「急に場所を変えたことだよ。」

「うむ、マオさえいれば怖くないのじゃ。」

「それでもだよ。（うわーうれしいなあ）」

「なんじゃ？怖いのかの？」

「違うよ、テオに危険があったらどうするんだよ。」

「そっそれは・・・／＼（うれしいのじゃ、そんなことを言われるとドキドキするのじゃ・・・）」

「とりあえず私から離れないでね。（赤くなって可愛いなあ・・・）」

「うむっ、わかっておるのじゃ。（むふー良い匂いがするのじゃ）」

「じゃ、行こうか？（うあー匂い嗅がれてるよー臭くないよね・・・）」

」

そんな話をしながら《夜の迷宮》ノクティス・ラビリンスに到着。

すると陰から女性が出てきた。

金髪の眼がきついお姫さまっぽい人だった。

その人が出てくるなり喋り始めた。

「はじめましてテオドラ皇女殿下。私はアリカ・アナルキア・エン
テオフィシユアじゃ。」

「ご丁寧なんでしょう。」

「して、なぜ場所を変えると？」

「はっ？ わらわはそちらが変更したいと聞いたのじゃが・・・」

「むっ？ 私もそちらが変えたいと言ってきたと聞いたのじゃが？」

「どうやら騙されたみたいです。」

「そのようじゃな。」

「どういうことじゃ？」

「つまりここは包囲されてるんだよ・・・敵に。」

ぱちぱちっ

「わかってるなら早いですね。」

「だれじゃ！」

「僕の名はアーウェルンクス、出来れば抵抗しないで頂けると嬉しい。」

「くっ・・・何の真似じゃ！」

「君たちがいると今は厄介なんだ。特に「真祖を超える真祖」君はね。」

「私が？」

「そう君がいると死人一人でない。それでは困るんだ。」

「そのどこが悪いんじゃ！」

「戦争が続かなくなる。それに君にやられた仲間が新たな扉を開いてしまったんだよ・・・はあっ」

「・・・・・・・・」

「それにね、なぜか妹が君にお熱のようなんだ・・・」

「・・・・・・・・」

「しかも新たな扉を開いた奴が僕を熱く見つめてくるんだ・・・」

「・・・・・・・・」

「それで・・・抵抗しないでくれないかい・・・じゃないと街を爆破するよ。（私怨で・・・）」

「なっ!?!? そんなこと許さんぞ!!!」

「なら大人しくしてるといい、三日さえ抵抗せずに居れば爆破はない。」

「くっ・・・仕方ない・・・連れて行け。」

「テオ・・・行こうか・・・」

「うむ・・・。」

夜の迷宮にて（後書き）

ダメだ・・・こんなんじゃないんだ。

文章の構成が下手でした。

次は上手く書きます。

その頃の赤き翼（前書き）

ぐだぐだです。

それでもいいという方は読んでください。

その頃の赤き翼

「マクギル元老院議員」

俺が証拠品を見付けてから数日後、俺達は再びマクギルさんの元を訪れた。

アリカ姫はヘラス帝国の第三皇女と接触を試み、俺、ジャック、ガトウ、詠春の四人は弾劾手続きの為にアリカ姫と初めて会ったあの広間の様な所にいる。

ついでに、他の『紅き翼』のメンバーはそれぞれ宿で待機だ。

「御苦労。証拠品はオリジナルかね？」

こっちに背を向けたまま、ガトウの呼び掛けに反応するマクギルのおっちゃん。

まあ俺だってアリカ王女と一緒に敵本拠地を壊滅させたくてしたわけじゃないんだけど、はっきり言おうノリノリでやってしまったと。その後は俺が詠春に説教されたけどな。

ちゃんとメガロセンブリアのナンバー2の執政官が奴らの手先だという証拠を見つけてきたのにあんなに怒らなくてもいいと思うんだが。

で、現在。俺、ジャック、ガトウ、詠春の面々で執政官の弾劾手続きをするためにマクギル元老院議員と法務官に会いに来ている。

「法務官はまだいらっしゃいませんか」

ガトウが聞く。

「法務官は・・・来られぬことになった」

「はっ・・・？」

「・・・あれから少し考えたのだが。ここにきて元老院が機能しなくなると国が終わる・・・そう思ってたね」

「ハア」

「私の意見だけではない。そう考える者も多いということだ。時期が悪い。時を待つのだ。今回は手を引いてだな……」

おかしい・・・こいつはマクギルのおっちゃんじゃねえ。

「待ちな。あんたマクギルのおっちゃんじゃねえな。何もんだ？」

ボン！ 俺が相手の頭を燃やすと同時にラカンも気合パンチを打っていた。

「ちよっ！？ ナギおまつ・・・元老院議員の頭いきなり燃やして・・・ラカンお前もなに殴ってんだ！？」

かなりテンパってるガトウ。

まあ俺はわかるとしてラカンが殴るのは想定外だったのか？

「バーカ。よく見てみなおっさん」

「そうだけガトウ。観察眼が全然足りてねーぞ」

「何っ・・・？」

炎の中から出てきたのはマクギル議員ではなく白髪の子供？

「……よくわかったね。千の呪文の男、千の刃。こんな簡単に見破られるとは思わなかつ「ドシュ」。」

「全く、まだ喋ってる途中なんだけど。やはり君達は「真祖を超える真祖」の次に危険だね。悉く組織の手足を潰してくれて・・・おかげで対処に追われたよ」

チッ。当たる前に転移魔法で逃げてまた戻ってきたな。
避けるのが無駄に上手いヤツだ。

「ごちゃごちゃうるせえ！」

ラカンが一人突っ込むが、

「通しませんよ」

「くらえ」

と、白髪の野郎の仲間の登場で攻撃が阻まれる。

「強えぞやつら！」

「ハッハ。だが生身の敵だ。政治家だ何だとガチ勝負できない敵に比べりゃ、万倍！！ 戦いやすいぜッ！！」

意気揚々と敵を潰しにかかろうとする俺達だったが、

「わしだ！ マクギル議員だ。スプリングフィールド、ラカン、ヴァンデンバーグ、詠春。奴らは帝国のスパイだった！ 奴らの仲間もだ！ 今も狙われている。軍に連絡をッ・・・は、早く救援を頼むッ！！」

「げ」

「やられたな」

「君たちも少しやりすぎたよ。悪いが退場してもらおう」

「ハッ！ その前にテメエの人生の幕引きが先だろ」

俺とジャックとで飛び掛ったが、結局仕留めることは出来ず、その後軍の介入により、首都、そして連合を追われることになった。

その頃の赤き翼（後書き）

読んでくれてありがとう。

脱出!! (前書き)

ぐだぐだです。

脱出!!

Side アリカ

この場所に幽閉されてからのくらい経ったのか・・・。
時間感覚がマヒしている。

まだ我が騎士は来てくれない・・・。
何を手間取っておるのか。

早く助けに来ないか!

私にはまだやるべき事は山ほどあるのだからこんなところでグズグズしてなど居られないのだぞ!

だいたい我が騎士はデリカシーが足りない。

私に馴れ馴れしいし、な。

いや、それは今は良い。

あのような態度の者は今までになかった。

私にはとても新鮮で心地よいものを感じた。

正直こうしてただただ我が騎士を待つのも嬉しいものに感じてくるから不思議なものだ。

そうこう考えているうちに何やら外が騒がしい…。遠くの方で「敵襲ー!」、「見張りは何をしていた!?’」などの声が飛び交っているのがここまで聞こえてくる。

敵襲?ここに攻め入った者が居るということか?

ここまで考えて私は思い当たった。

我が騎士だ…。

ようやく来てくれた…。

まったく…遅いぞ?待ち草臥れてしまったではないか。

そんな思考に耽っていると私の目の前ではヘラス帝国の第三皇女とマオ（捕まったときに聞いた）が扉に近づき耳を当てて声を良く聞き取ろうとしている。

「むう……。会話などはよく聞こえんな。あちらこちらから爆発音のようなものは聞こえておるのじゃが……」

「そうだね……。たぶんあの人達だろうと思う。」

「……………」

「のう？ アリカよ。これはお前の言っておった者達の仕業かの？」

「わからない。だがここに襲撃を仕掛ける者が他に居ると思えない。おそらく我が騎士とその仲間達だ」

そう態々このようなところに襲撃をかけるなど、そのような物好きが多く居るわけがない。

高い確率で私達のうちどちらかの関係者だ。

そしてこれは我が騎士で間違いないと感じている。
単なる私の願いかもしれないが……。

ひそひそ「のお、マオ……」

ひそひそ「なに？ テオ？」

ひそひそ「あのアリカの顔は恋する乙女のようなじゃないか？」

ひそひそ「そうだね……。たぶん今テオが言ってた人達の中にいるんじゃないかな思っている……」

ひそひそ「やっぱりマオもそう思うかの？」

ひそひそ「でも、あの顔自分の気持ちにまだ気付いてないみたいだけど。」

「さっきからなにひそひそ話している？」

——ドゴンツ…！ドカンツ…！

「な？なんじゃ？何の音じゃ？」

「この音は…」

——ゴギャンツ！がらがらっ…。

壁の向こうから何やら鈍い音がする

。まるで壁自体を壊そうとしているかのような大きな音だ。

外側から数回叩きつけられた壁が崩れ去った。

そしてその開いた穴から出てきたのは…。

「よお来たぜ！姫さん！」

「遅いぞ、我が騎士」

出てきたナギに私は最初に言おうと決めていた言葉を口にするの
だった。

S i d e o u t アリカ

脱出!! (後書き)

読んで下さりありがとうございます。

薔薇？

「よお来たぜ！姫さん！」

「遅いぞ、我が騎士」

王女殿下はここ数日で感じた事を思うとツンデレだよね？

いや、クーデレかな？

助けられて嬉しいなら形振り構わずにナギの胸に飛び込めばいいのにね？

恥ずかしいのかな？

——シュッ！パシッ！

「・・・王女殿下、なぜに私を殴ろうとするの？」

「・・・わからんが、マオが何か不埒な事を考えていたように感じたので身体が勝手に動いたようだ」

・・・勘がいいね。

受け止めたからいいけどさ。

直撃したら重傷モノだよ？王族の魔力ってすごいね？受け止めた手が軽く痺れてますよ？

ダメージは殆んどないけどね？

無防備でコレを受けたくはないな。

ナ「姫さん・・・なんでこいつがここにいるんだ？」

ア「こいつとはマオの事か？」

マ「ああ、私とテオドラはアリカ様とここに捕まっていたのですよ。」

」

ラ「おいおい、あんたがいるならなぜ逃げださなかったんだ？」

テ「民を人質に取られたのじゃ・・・」

ラ「そりゃあ・・・大変だったな。」

エ「それよりもナギ、早くここを出ましよう。」

ナ「そうだな、いくら敵がほとんどいなかったとはいえ今仕掛けら

れると厄介だからな。」

そんなこんなで夜の迷宮を脱出。

そして赤き翼の秘密基地に。

テオ「なんじゃここは！？ただの掘っ立て小屋ではないか！？」

マオ「テオ・・・彼らにも彼らなりの事情があるのですよ・・・（ほろりっ）」

テオ「そうなのか・・・すまなかったのじゃ・・・」

ナギ「ちよっ、ちよっと待て！なんか勘違いしてないか！？」

マオ「いえいえ、こちらは助けてもらったのに・・・口を出してすみません。」

テオ「悪かったのじゃ・・・」

ナギ「いや、だから、違うっつうの。」

アル「そうですよ。もともところは一番初めの隠れ家なので、一番ぼろいのですよ。」

ナギ「アル・・・今お前がいてよかったと心から思った・・・」

アル「ナギ・・・あなたにとって私たちの熱い絆はそんなものだったのですか!？」

ひそひそ「のおマオ、あれはいわゆる薔薇というもののなのじゃろうか？」

ひそひそ「アリカ様が可愛そうですね・・・（ほろり）」

ナギ「そこ聞こえてるぞ! だいたい違うからな!」

「俺は薔薇なんかじゃねえ！」

エイ「驚きだ・・・ナギがそんな言葉知ってるなんて・・・」

アル「まあ・・・それは置いておきましょうか。」

ナギ「おいっ！アル！お前が言い始めたんだろう！？」

アル「まあ、いいじゃないですか。」

アリ「お主らは何を言っているのだ？」

ナギ「姫さん！？いつからここに！？」

アリ「む？薔薇じゃないとか叫んでいたくらいからだか？」

ナギ「違うからな！？俺は薔薇じゃないからな！？」

アリ「ところで・・・薔薇って何のことなのだ？」

アル「それはですね・・・同s「この野郎！言うんじゃないですね・・・」危

アリ「お主は何をしておるナギ！？」

アル「まあまあ、とりあえずこれからどうするかを話しましょう。」

アリ「む？そうじゃな。」

マオ「とりあえず、私たちはどうしましょうか？」

アリ「ちよつとの間ナギ達と話さしてくれぬか？」

マオ「別にかまいませんよ。」

テオ「わらわもかまわないのじゃ。」

薔薇？（後書き）

ぐだぐだでした。

中途半端なところで切れちゃいました。

作者の腕が悪いせいです。

書いてて楽しかったけど・・・

ついでに

ア…アリカ ナ…ナギ エ…詠春 テ…テオドラ
ラ…ラカン マ…

真央

読んでくれてうれしいです。

増えた最強と騎士の誓い（前書き）

友達から言われました。

このまま原作通りに進むのか？と

少しの間だけであとはハツチャケます。

増えた最強と騎士の誓い

「さーて姫さん。

助けてやったはいいいけどこっからは大変だぜ。

連合にも帝国にも・・あんたの国にも味方はいねえ」

・・・さっそくナギが試しにかかったね。

この嫌になる程の現実にアリカ様はどう立ち向かっていくのかな？

「恐れながら事実です王女殿下。殿下のオスティアも似たような状況で・・。

最新の調査ではオスティアの上層部が最も『黒い』・・という可能性さえ上がっています。」

ガトウの話を聞いて思ったんだけど・・・こりやまたまずいんじゃないかな。

一応アリカ様がオスティアのストッパーとなっていたはずだから捕まった事で権力がもう意味を成さない。

黒幕の好き勝手が更に通り易くなったってわけだね。

唯一の味方だったマクギル議員は死んだらしいしね。

不味いよねほんと。

「やはりそうか・・。」

思うところがありそうだが気持ちの切り替えは出来てるようだ。
流石としか言いようがないなあ。

普通ならこうはいかないだろうから。
主に責任的な意味でだけど。

「我が騎士よ。」

「だからその我が騎士って何だよ姫さん。クラスでいったら俺は魔法使いだぜ？」

ナギ・・・察してやりなよ。

おそらく姫様はお前が欲しくてたまらないんだよ。

むう、ここは僕がヒト肌脱いで恋のキューピッドでもしようかな？

・・・やっぱやめとこ。

よけいに話しがややこしいことになりそうだ。

「もう連合の兵ではないのじゃろ。
ならば主は最早私のものじゃ。」

「な・・・」

おう、強行手段に出たねアリカ様。 そんなにまでしてナギが欲しかったのかあ。

まさかのジャイア○の法則をここで、しかも生で見れるとは・・・。
感動・・・いや、感激ものだな。

さらにここでドラ○もんの役がいればなおいいんだけだな。
ナギの奴は文句ありそうだがほんとに察してあげなよ。
これじゃ報われないよアリカ様が。

「連合に帝国・・・そして我がオスティア。
世界全てが我らの敵という訳じゃな。
じゃが・・・

主と主の『紅き翼』は無敵なのじゃろ？」

言いたいことはわかるけどな、何故に主の『紅き翼』と言う辺りで
ナギだけしか見てないの？

まあ、ナギラブだから仕方ないんだろうけどさ。

ああ・・・なんか面倒事が起きそうな予感がする。

「世界全てが敵——良いではないか。
こちらの兵はたったの7人。
だが最強の最強の7人じゃ」

「ちょっと待つんじゃない！」

あーあゝ、となるとこの流れはもしかして…。

「わらわのマオも世界最強じゃ！」

やっぱり・・・

「たしかにそうだな・・・マオ殿よ我らの手伝いをしてくれるか？」

この流れでは断れないでしょ。

「いいですよ。戦争が早く終わるなら。」

「ありがとうございます。」

正直お礼を言われるとは思わなかったよ。

「さて・・・我等が世界を救おう。

我が騎士ナギよ我が盾となり剣となれ」

「・・・へ」

騎士の誓いかあ・・・。

ある意味、告白だね。

ナギが、俺は魔法使いだっつーのにか言ってるけど・・・とにかくおめでとう。

僕は全力で祝福するよ！！

あゝあ、これでナギは人生の墓場を迎えちゃったよ。

もう逃げられないよ！（姫様から）

ナギが寧猛な笑みを浮かべる。

おや、受ける気満々ってことか。

あつ、耳が真っ赤だ。

みんな気付いてないなあ。

言わないけど。

姫様が剣を抜いて掲げる。

やがて剣はナギの右肩の上で止まる。

「いいぜ。俺の杖と翼あんたに預けよう」

夕日が2人を照らして絵になるね・・・ほんと。
皆が笑みを浮かべてその様子を見てる。

その中でテオはなんか羨ましそうに見てる・・・
どうしたんだろ？

どうでもいいけど・・・剣・・・どこから出したんだろ？

増えた最強と騎士の誓い（後書き）

読んでもらってうれしいのだ。

最終決戦直前（前書き）

ヤツ
チヤツ
タゼ！

最終決戦直前

あれから『完全なる世界』の拠点という拠点を潰して回ること早半年…

いや、簡単に言ったけど、色々あったんだよ。

それはもう、笑いあり、涙ありの感動話。

きっと、僕がいつの間にか紅き翼の一員として世間に知られだしてから今までをまとめると、間違いなく単行本や小説、映画にできるくらいの内容だよ。

これ話をすると途轍もなく長くなるので、すみませんが勘弁して下さい……。

ラカンが全部終わったら自主製作映画作るぜ！！視点は俺だけだな！！みたいなことを言ってたけど。

……ラカン……それ、死亡フラグだよ……。

それはともかくとして、いよいよ全てに蹴りをつける為、僕達は最終決戦に挑むこととなった。

そんなわけで、現在僕達は王都オスティアの最奥部（墓守り人の宮殿）にきている。

「不気味なくらいに静かだな……奴ら」

「舐めてかかってるんでしょ。だいたい悪の組織なんてそんなもんです。」

「いやいや、逃げる準備してんだろ。こんなバグキャラ集団相手にするほうが馬鹿らしいし。」

ナギが音沙汰の無い状態に僕が軽く否定する。

それに詠春が冗談とも本当の事ともわからないことを言うと、ジャックがちげえねえと笑い、ナギもそれもそうかと笑っている。

その場にいるアルはいつも通りに笑い、周りの兵士が不謹慎だぞと注意してくる、残念な事に髪をテオドラに可愛く切られてしまったゼクトは無言である。

でも・・・ゼクト・・・似合うな・・・少女服が。

ついこの前まで知らなかったゼクトが女の子だったなんて・・・。

ナギやラカン、詠春や僕も気が付かなかった。

ましては幼女愛好家（YESロリータ・NOタッチ）と赤き翼では言われているアルでさえ気が付かなかった。

それはさておき。

今は集中しよう。

「ナギ殿！」

帝国・連合アリアドネー混成部隊。
準備完了しました」

「おう！」

この場でのアリアドネー騎士団の総指揮官であるセラスが報告に来た。

それにナギが受け答える。

どうやら説得とともに共感を示してくれた連合や帝国の別働隊に中立であるアリアドネー騎士団も世界の危機を感じて僕たちと一緒に攻めてくれるようだ。

「あんたらが外の自動人形や召還魔を抑えてくれりゃ俺達が本丸に突入できる。頼んだぜ」

「ハッ。」

それであのお願いが・・・ナギ殿、マオ殿。」

「ん？」

「私になにか？」

あれ？私にとは珍しい。
一体何だろ？

「サ、サ、サインをお願いできないでしょうか。」

「おう！いいぜ。」

「まあ、いつか。それじゃ、私m「いえ！マオ殿には違うお願いが・
・。」・。。。」

言葉を遮られた・。

「・・・それでなに？」

「あの・・・その・・・抱きしめさせてください！！」

「へっ？」

「その・・・ダメでしょうか？」

「うーん、まあいいよ。」

「ありがとうございます！」

ぎゅっ！と抱きしめられた。

女の人は柔らかいなあ・・・

「ありがとうございます！！これで思い残すことはありません！
！」

そうセラスさんが言って、微妙な顔をしたナギがサインを書き、セ
ラスさんに渡した。

そういえば、私もナギもグレートブリッジの一件以来ファンクラ
ブが出来たと聞いた。

会員数はほぼまったく同じらしいんだけど、多すぎてどちらが多い

んだかわからないらしい。

有名になるってのは嬉しいもんだね。

なんか少し恥ずかしい気がするんだけどさ……。。

余談だが、ジャックはもっと早くにできていたらしい。

まあ、あいつは赤き翼に入る前から有名だったしな！。なんか羨ましい。

でもガタイのいいお兄さんたちが多いらしい。

なんでだろう？

最終決戦直前（後書き）

ゼクトのまさかの少女化。

なんか・・・ゼクトを女の子にしたら可愛くないかな。

そんな感じでゼクトを少女化させちゃいました。

出番はあるのか？

それはまだわかりません。

なにはともあれ、読んでくれてありがとう。

ボス直前（前書き）

戦闘描写がぐだぐだです。

半分以上妄想の塊で出来てます。

正しいかもわからない。

主人公マジ空気。

よろしければ見てやってください。

ボス直前

たった今ガトウから連絡が入った。

連合・帝国の正規軍の説得は間に合わないらしい。

「既にタイムリミットだ」

「ええ。彼らはもう始めています……『世界を無に帰す儀式』を。
世界の鍵『黄昏の姫御子』は今彼らの手にあるのです」

「ああ。よおしつ、野郎ども。行くぞ!!」

「「「「おお!!」」」」

「一番槍は俺が行く!千の雷!!」

ドッガアーーン

悪魔たちが消滅。
帰って行っただけだけど。

「次はワシじゃ。萌える天空!」

ボオオオーーン

うん?今なんか聞き間違ったかな?

「私が行こう。真・雷光剣!!」

ピシャッーーン

おおっ、縦に道が。

「次は私ですね。」

ズンッ！！！

黒い球が・・・敵を・・・ぐろいなあ。

すぐに消えるけど。

「よっしゃあ！！やってやるぜ！！ラカンインパクト！！」

ドゴーーーン

まさにただのパンチ。

次は僕の番だ。

何をしようか？

そうだあれにしよう。

「精霊よ・・・魔獣よ・・・ドラゴンよ・・・我が呼びかけに答え
てくれ！！」

おおっ、成功だ。

魔方陣が空にたくさん浮かびあがった。

そこから友達たちが出てきた。

ボソツ「・・・僕何もしないよ。」

「お氣をつけて。」

セラスさん・・・帰ってきますよ！

世界を救ってあげますよ。

みんなの為に！

「「「「「おお！！」」」」」

そんなこんなで『墓守り人の宮殿』に突入。

『墓守り人の宮殿』潜入して罠を回避し、敵には僕のネギやアルの重力魔法やラカンのパンチやナギの魔法の矢や詠春の峰打ちで倒しながら進んだ。

「やっぱり計画の邪魔をするのは君達か『千の呪文の男』に『幼女神降臨』・・・」

「お前はあの時の！」

「私をその二つ名で呼ばないで・・・」

「僕の名はアーウェルンクス、ここから先は通す事が出来ない。」

「なら、お前を倒して通ってやるぜ!!」

「・・・無視？」

「やらせないよ…（僕の苦勞を知らないくせに!!）」

アーウェルンクスの後ろから五人でてきた。

詠春に剣を持った騎士のようなやつが。

ゼクトとアルに二人の魔法使いが。

ラカンには筋肉達磨が。

ナギにはアーウェルンクスが。

僕には可愛らしいアーウェルンクスを少女にした感じの女の子が
お互いに敵が決まり戦いは始まった。

「あの…話しませんか？」

「・・・？戦わないの？」

「私達は足止めを言われただけです」

「なら、ナギが戦い終わったら終了だよ？」

「はい！！でもお話はしてくれますよね？」

「何が聞きたい？」

「そうですね・・・好きな人はいます？」

「ううん、いないよ。」

「好きな食べ物は何？」

「ネギ料理。」

「好きなことは人の笑顔を見ること。」

「私をどう思います？」

「可愛い子。」

「そっそうでs「くっさすがだね千の呪文の男・・・」uか？」

「どうやら終わったみたいだね。」

「そうですね・・・」

「じゃあ行こうかな。」

ナギside

「やらせないよ・・・」

うおっ

なんだこいつ？

身体から黒いオーラが出てやる。

「へっかかってきやがれ！（だが、倒しやあいいことだ！）」

「行くよ・・・（僕の恨みをくらえ！！）」

白髪から土の矢が全方位から飛んでくる。

だが・・・

「はっこのくらいどうってことないぜ！！くらえ雷の斧！！」

「くっ！ここで負けるわけにはいかないんだ！！（貞操の為に！！）」

」

なんか急に攻撃が力強くなりやがった！

「しやらくせえ！！くらえ雷の暴風！！」

「当たらないよ！君たち・・・いや『幼女神降臨』のせいで僕は・・・僕は・・・」

「マオがどうした！！くらえ！！」

「がはっ！くっさすがだね千の呪文の男・・・（これで・・・僕の貞操は・・・）」

「これで終わりだ！」

「くくくっ、君たちは僕らがボスだとも思っているのかい？（死なばもろとも！）」

「なんだと！？」

その時、俺たちを光が貫いた。

ボス直前（後書き）

感想を待ってます。

読んで下さり恐悦至極。

最後の戦い（前書き）

ぐだぐだです。

やっぱり主人公マジ空気。

最後の戦い

「・・・グハッ！！！！」

一条の閃光がアーウェルンクスごとナギの腹を撃ちぬいた・・・。
そのまま二人は糸の切れた人形のように倒れる。

「「「「ナギ！？」「」「」」」」

アーウェルンクスの蔑みと自白にナギが疑問に思う暇も無い。
ナギが壁を抜けて後ろの宮殿側に床を碎いて落下、吐血した。
服は既にボロボロで体全体が血塗れ状態で痛々しい。
全員が驚きの表情を隠せないままナギを見た。

「「「「「！？」「」「」」」」」

その場にいた全員がナギもやられてしまった事に驚愕する。

「誰だ！？」

突然に起きた惨状にラカンが周りを警戒する。

「！？」

そして王宮側にその姿を認識する！

ユラツと陽炎の如く現れたそれは圧倒的な何かを放っていた。

「いかんッ！『最強防護！！』」

ゼクトがいち早く危機を察知し何重にも障壁を展開する。

気づけば大きな波動が紅き翼の全員を飲みこもうと迫っていた。

『気合い防御！！！』

ラカンも気合いでの防御態勢でそれを防ごうと動き、アルもまた後方の位置だったのでそのまま障壁の展開、詠春はやられたナギを守るために刀を構えて気での防御をしている。

僕は自分にできる最高の結界を皆に張った。

ないよりはましでしかないが・・・おそらく一撃だけは耐えることができる。

赤き翼と全員の防御を合わせれば少しの間だけ耐えられるだろう。

ドウッ！！！！

ドウッ！！！！

くっ・・・まだだ、まだ耐えられる。

ドウッ！！！！

もう限界・・・

そして波動が数回着弾した後結界が壊れた。

僕を含め全員が血塗れの負傷になり波動で碎けた橋の表面で倒れ伏していた。

中でも詠春がかなり酷く負傷し、気絶している…。

「ぐっ・・・馬鹿な・・・」

両腕が無い状態でラカンが呻く。

「まさか・・・アレは・・・」

負傷の度合いはメンバーの中で軽いものの大ダメージなのは間違いない状態のアル。

そのアルも顔をあげ、紅き翼を追い詰めた者の姿を呻きながら確認する。

それは黒の布が多いローブを来た顔の見えぬ存在。

風に棚引く黒い布がいつそうに怪しい雰囲気を出しており。

強大な魔力を放っている所から完全なる世界の首領である造物主ライフメイカーであることがはっきりと読み取れた。

「かふっ・・・へっ！」

その中でもナギは意識を絶つことなく起きていた。
赤き翼のメンバーの殆どが恐れる中でナギはその存在を血を吐きながらも不敵に見据えていた。

「ぐっ・・・」

ラカンが動こうとする。

じっとしていれば死が待っているのが解かりきっているためだ。
死亡フラグがこんなところで効力を発揮するなんて・・・。

「待てコラてめえっ!!!!」

しかし造物主はそのラカンや他のメンバーに一瞥もくれることなく、
唯、後方へ目を向けた上でそのまま空間転移して消えてしまった。

「任せなジャック」

ナギが弱い足取りながらも立ち上がる。

息切れしながらも怪我をしている個所から無理をしているのは誰が見ても明らかだ。

だがその顔は不敵であり、眼光は全くと言って良いほど衰えてはなかった…。

まるでまだ希望が残っているかのように…。

他の者が絶望している中でまだ、ナギの目は死んではいなかった。

そして僕も諦めてはいない。

「い・・いけませんナギ！その身体では」

同じく息切れしつつも立ち上がりナギを止めようとするアル。

「アルお前の残りの魔力全部で俺の傷を治せ」

「し、しかしそんな無茶な治癒ではッ！」

「30分持てば充分だ」

「ですがッ！！」

アルが必死にナギを止めようとする。

それもそのはず。

明らかに致命傷のナギを治したとしても生命力が著しくダウンしている状態なためもう一度致命傷を受ければ死亡確定である。

「ふふっ、よかろう。ワシもいくぞ馬鹿弟子！」

こちらも息切れしつつ立ち上がり血を頭から流した状態で答えるゼクト。

「ワシが一番傷も浅い」

「お師匠・・・」

「いや、一番浅いのは私です。」

事実、僕は流れる血ほど怪我はしていない。

「マオ・・・お前には魔力が殆んどないじゃないか・・・」

「大丈夫です。どうせやらなければ死ぬんです。」

互いに息切れしながらも僕とゼクトとナギは頷く。

「ゼクト！マオ！たった3人では無理です！」

アルがそれでも止める。

相手は一人とはいえど自分達よりも遥かに圧倒的な力を持つ者だ。
無理もない。

全員が全身ボロボロの状態。

もはや『絶体絶命』という言葉がピッタシだから。
特にナギは誰がどう見てもドクターストップ状態だからなあ。

これ以上何かやらかせば本当に死ぬかもしれない。

それでもね、アル。

男は好きな人を待たせておいてこんな事でくたばるわけにはいかな
いんだよ・・・。

「アル！ここで俺たちが儀式を止めなけりゃ姫さんが困るだろうが

「!!」

「ですが！死ぬかもしれないですよ！」

「どうやら気合いは充分。」

ナギも不敵さが増してるから大丈夫だろうか。

なんだかんだ言いつつアルもナギの言うとおりに治癒魔法を掛けてるからそれしかない、と解かってるんだけど心配してるんだね。

「ここで奴を止められなければ世界が無に帰すのじゃ。
無理でも行くしかなからう」

ゼクトも解かってるようだ、流石はナギの師匠。

息を整えていつでも行けるようにスタンバイしている。

僕も準備はOKだ。

ナギも飛翔準備に移る。

「ナギ、マオ！ゼクト！待て！奴はマズイ！奴は別物だ。」

あれ？珍しい。

ジャックにいつもの余裕が無いなんて。

「死ぬぞッ！態勢を立て直してだな・・・」

「バーカ、んなコトしてたら間に合わねえよ。
らしくねえなジャック」

ナギの言うとおりでほんとにらしくないな。
僕もカッコいいとこ決めるかな・・・。

「俺は無敵の千の呪文の男だぜ？
俺達は勝つ！！任せとけ！！！！」

「僕はすべてを守るため！手の届く範囲を救うため！諦めない！だから、安心して帰りを待ってて」

ラカンが呆けた顔をして僕を見ていた。

だが、気にはしてもらえない。

「行くぞ！師匠！マオ！」

一気に王宮へと掛け抜く僕とナギとゼクト。
僕も後ろは振り向かずただ前の難敵のみに顔を向ける。

ここで終わらせないと皆の笑顔が守れない。

「マオッ！！ナギィッ！！」

僕たちに声を飛ばすジャック、だけどジャックも解かってるんでしょ？

ここでやらなきゃ何もかもおしまい。

いつものようにめんどくさいだけじゃ済ませられないことを。

最後の戦い（後書き）

読んでもらいうれしいのです。

決着・・・（前書き）

・・・うろ覚えで書いた今回。

いろいろぐちゃぐちゃな気がします。

それでも良ければ見てやってください。

決着・・・

「ナギ。ジャックにはああ言ったが、何か作戦でもある？ あれは確かに次元が違うよ」

「作戦？ 別にねえ！」

ええー、ちよつとお気楽すぎるんじゃない？

「ま、なんとかなるだろう？ それともマオは何か考えがあるのか？」

僕？

うーん・・・

「一つだけ手がある。これを使えばほぼ間違いなく悶絶させれるよ」

「マオ・・・、まさか『あれ』をやるのか？」

「何じゃ？ マオの考えてる事が分かるのかの？」

しかし、問題があるんじゃないろう？ どこか躊躇つとるようじゃし（ナギは何故顔を青くしているのじゃ？）」

「うん。確かに問題がある」

「何が問題なんだ？」

「後ろを取らないと出来ないし、僕にはトドメをさせれない・・・」

「けどあれは奴を確実に悶絶させられるだろ？（俺やラカンでさえ悶絶したからな・・・師匠は忘れてるのか？）」

「多分・・・」

「だったらやれよ、マオ。時間稼ぎくらい俺たち二人なら簡単だぜ！
な、師匠？」

「うむ、それくらいなら出来る。」

「分かった。じゃあ頼むよ？」

「任せろ！」

「俺が使えるすべてを注ぎ込んだ技を持って悶絶させるから・・・
ラストはよろしく。」

・
・
・
・
少し進み、俺たちの前にはラスボス創造主ライフメイカーがたたずんでいる。そして奥にはクリスタルの中に捕われた少女がいた。

「姫子ちゃん！」

姫子ちゃん？を見てナギは飛び出しそうになったけど、それをゼクトが止めた。

「ナギ！　すぐに助け出したいのも分かる、じゃが最大の敵が残ってるのじゃ！

まずは奴を倒さないことには黄昏の姫御子もこの世界も全て終わりじゃぞ！」

「師匠・・・分かった・・・それじゃあ、マオ、頼むぞ！」

「わかった！　ナギも何をやるのかは任せるけど・・・一瞬でいい気を引き付けてくれ！」

僕がこれから使うのは僕のすべての技術を使った技。

「マオ、早く頼む・・・俺とゼクトがどれほど持ち堪えられるかは分からんからな」

「来るぞ！　ナギ！」

「おう！　食らえ！　雷の斧！」

ナギが敵の攻撃を雷の斧で打消した。

その間に僕は極限まで気配を薄めて敵の死角に潜り込んだ。

「ナギ！　合わせるのじゃ！　萌える天空！」

「りょーかい！　千の雷！！（萌える天空？）」

敵はナギとゼクトの攻撃を簡単にはじく。
そして魔法を放つ。
だけど、ナギ達もその攻撃をしのぐ。

「しぶといな人間」

「お生憎様、俺は元々しぶてえゝんだッ!!」

ナギが強がりと言う。

敵は口に微かな笑みを見せた。

「だがいつまでそれが続く？」

いまだ!!

敵の警戒がそれた瞬間だった。

僕は全力で敵の後ろに回りネギを瞬時に出し、突き刺した。

「ぐあああああ!？」

敵は悶絶を確かになっていた。

だが、最後の力で僕は弾き飛ばされた。
そこで僕は意識を失った。

(僕・・・役に立ってない?)

ナギside

マオが奴にネギを突き刺した。

最後にマオをふつとばし
あの腰が破壊されたかのような痛みに・・・
奴は悶絶していた。

「師匠!!」

「千の雷!!」

師匠が俺に合わせて千の雷を打ってくれた。

これで終わりだ・・・。

「・・・クック、フフ・・・フフはは」

そんなことを考えると奴は壊れたか様に笑い出す。

まだ死なねええのかよ!?

というか痛くねえのかよ!?

いや・・・よく見れば腰が引ける・・・

「はははははは!! 私を倒すか人間!? それもよいだろうッ
!!」

最後の力と言わんばかりに膨大な魔力で巨大な魔方陣がヤツの後方に浮かび上がる。

その複雑怪奇な曼荼羅模様に近い魔方陣がどんどん巨大化する。

どっから、それだけの膨大な魔力を捻り出してるのか疑問に思っぜ！！

「我を倒し英雄となれ！！ 羊達の慰めともなろう！！」

「しぶてえ奴だぜ！」

そして魔方陣から黒色の上の中以上の威力を持ったレーザー？が一斉に俺に襲い掛かってくる。

しかも雷の斧を相殺する威力だ。

「我が2600年の絶望を知るがいい！！」

「ケッ！」

下手に避けることも出来ないほどの極太な魔法が俺に襲い掛かる。

俺は避けるのを諦め前方に障壁を展開させてダメージを最低限に抑えながらヤツに近付く。

ヤツが何か言ってるが、そんな事は関係ねえ！！

「グダグダ、うるせええッ!!!!!!」

一々語ってんじゃねえよ!!

もう殆ど魔力も気もねえ・・・それでも明日の分の魔力を引き出せ・
・俺!!

全身に纏う強化魔法の質量が一気に上昇していく。
持てる最後の魔力を籠めてヤツを殴る。

殴った一撃はヤツの腹部を貫き宮殿を貫通、下の雲海の先で大爆発
する。

「たとえば、明日、世界が滅ぶと知ろうとも!!」

俺は・・・俺たち【紅き翼】は、そんなケチッこい事の為に戦って
んじゃねえ!!

姫子ちゃんを助け!!

序に世界も救って、世界から戦争を無くす!!

アリカのためにも!!

たとえば俺の力が届かなくとも人間は、その程度で潰れる存在じゃね
え!!

救えなくとも次世代が世界を救ってくれる!!

そうやって世界は救われていくんだよ!!

光と雷の《魔法の射手》を一斉に発動させヤツを追い込む。
もう攻撃させる隙すら生ませない為に・・・。

「あきらめねえのが人間ってモンだろうがッ!!」

ヤツを殴り蹴り飛ばす。

そして、長年一緒に戦ってきた俺の相棒である杖を雷を纏わせる。

「くっくく・・・世界を救うか？武の英雄には世界は救えん！！」

だから御託はいらねえ！！

貴様が言っていることは、唯の自分勝手の自己完結だろおがああ！！
雷を纏って槍に形状を変化させた杖をヤツ目掛けて投げる。

「人・・・間を――なめんじゃねえええーッ！！！！！」

ヤツに槍が突き刺される。

コレによりヤツは消滅していく。

序だが宮殿も無事じゃないけどおな・・・。

「ハア・・・ハア・・・」

最強の俺様でも疲れたぜ。

途中で師匠の援護がなかったら遣られたの俺じゃねええのか？
肩で呼吸するほどに息荒々しく呼吸する。

「大丈夫じゃったかなギ！？」

「ああ、なんとか・・・。」

「そうか・・・早く黄昏の姫御子連れて脱出するぞい！」

「ああ！マオの奴も一緒にな！」

そうして俺たちの戦いは終わった。

決着・・・（後書き）

たぶんこれからは一日一回の投稿になります。

データが半分とんだせいで！！

書き直し中です。

これからどうぞよろしくお願いします。

式典と・・・(前書き)

明らかに作者の力不足です。

それでも良ければ見てやって下さい。

式典と・・・

「ん……………？　ここは？」

「すう…………すう…………」

「テオ？」

僕が目覚めたとき横にはテオが僕の手を握りながら寝ていた。

「ああ、起きましたか？」

「アル？みんなは世界はどうなった？」

「ええ、みんな無事です。それに世界は守られましたよ。」

「そっか・・・アルその手に持ってるのは何？」

「これは・・・カメラです。」

「なぜカメラを？」

「まあまあ、それは置いておいて。ナギ達が待ってますよ。それに、テオドラ皇女殿下も起きるのを待ってたんですよ？」

「・・・どれくらい寝てた？」

「せいぜい半日程度です。」

「そっか・・・」「マオ！起きたのか！」はい起きました。」

「マオ・・・心配したのじゃ！だから・・・罰じゃ！なんでも言うことを聞いてもらおうのじゃ！」

「うん・・・仕方ないなあ。」

「絶対なのじゃ！」

「それで・・・いつまで空気になってればいいんでしょう？」

バンっ！！

「マオ！起きたか！！」

「どこか悪いところはないか！マオ？」

ナギとラカンが飛び込んできた。

「うん。一応悪いところはないよ。元気いっぱいだよ。」

「そっか！よかったぜ。マオのおかげで造物主の動きが鈍くなって倒せたんだぜ！ありがとな！」

そっか・・・役に立てたんだ。

「それはいいんだが・・・もうすぐ式典始まるぞ？」

「そうでしたか・・・私は体調が悪いので失礼します。」

「おい！アル！！あいつ逃げやがったな・・・！」

「まあまあ、いいじゃねえか。」

「おい、ラカンお前なんか変だぞ？」

「ああんっ？俺のどこが変なんだ？」

「いや・・・まあいい、とりあえず式典でるぞ！」

「そうじゃ！マオ式典にはこれを着て出るのじゃー！！」

渡されたのは淡い青色のワンピース・・・。

うーん、着てもいいけど・・・僕男なんだけど。

「いいじゃねえか！着ろよマオ！！」

ボソッ「ラカン・・・惚れたな？」

ボソッ「マオはやらぬのじゃ！」

さて、とりあえず僕達は世界を救った英雄になった。

紅き翼とその一員となったテオドラの騎士が共同で世界を救った。

と、言うことで俺達は何やかんやあって表彰されている訳で、

「・・・こんなに沢山の人の前を歩くの?。」

「我慢しろよそのくらい。」

とりあえず僕はテオのリクエストの恰好をしていた。

何か偉そうなオジサンが・・・ってよく見たら元老院の一人だ。

アリカ姫とテオドラの前に来て、膝を着いて頭を下げて喋り始めた。

「云々かんぬん・・・!!」

まあ元老院の一人が長々しく何か言った後にメダル的な何かをもらえるらしい。

要約すると、すごいことしたから金メダル!みたいな。

ナギがビンタもらったりして、僕の番になった。

僕はテオドラからもらうらしい。

まあ、所属が帝国のテオの騎士だからね。

「では、マオ・シンドウよ。お主にこれを授与する。」

「光栄の至り。」

僕はそういつて膝を着k……………膝をも！……………。

ダメだ！裾の短いワンピースのせいで膝が着けない。

ラカンが覗こうしていたので後で刺すのは確定として、とりあえず薄い煙幕をした。

で、膝を着いて頭を下げかけてもらおうとした。

「むう。マオよ。なぜ隠すのじゃ？」

「あ、ごめん。じゃないとスカートの中身が見られちゃうから……。」

「あっ……すまないのじゃ……。」

そのまま首に掛けてもらい煙幕が完全に無くなった。

皆の方を振り返るとすごい大歓声が。

というか奇声と言うか落胆の悲鳴というかが聞こえてきた。

いつせいにカメラで撮られて、アルやらラカンも写真を取ってるし、何か俺やらかしたかな？

そのあとみんなで大宴会みたいなことをして無事を祝った。
ラカンがやけに僕に近づいてきてテオに威嚇されていた。
どうしたんだろう？

そういえばアリカ様が居ないなあ・・・。
どこだろう？

オスティアで・・・(前書き)

今回も割とぐだぐだです。

オスティアで・・・

アリカ様が居なかったので探して見つけると。
悲しそうなだけ嬉しそうにしていた。

たぶん・・・ナギのことを考えてるんだろう。

何かアリカ姫がナギを思い出したりしていた時にガトウが現れた。
すごく疲れた顔してる。

大丈夫かな？

「時間です。まもなく崩落の第一段階が。」

何の話かさっぱりだ。アリカ姫も真剣な表情になって

「進捗状況は？」

と聞いていた。

「アスナ姫封印直後から全艦隊全力であたっており、現在37%。」

アスナちゃんを封印？

アスナちゃんはナギ達とともにいたけど？

「陛下のお考えどおり式典と称しこの離宮島に全市民を誘導しております。情報統制により混乱もこれまでのところありませんが……
…崩落が始まればその限りでは……。全市民の救出は困難を極めるかと……。!!」

………崩落。

オスティア市民が死ぬかも知れない。

アスナちゃん封印。

これから考え出される答えは・・・・・・・・・・・・・・・・オスティアが崩落？

何で？

そういやあの魔法が正常に稼動したとすれば・・・なるほど。
今日辺りに魔力消失現象が起こって浮いてる大陸は落ちるかもしれない。

・・・・・・・・正常に稼動したとすればだけど。

「・・・・・・・・ツ！！わかった。妾も直接指揮にあたる！！」

と、駆け出しかけたのを。

「ちょっと待って！！」

「マオか・・・・・・・・今は急いでいる。喋ってる時間は無い。」

ガチで怒ってる顔。怖い。

「いやいや。何故急いでるのか知らないけど、とりあえず、状況を説明してください。もしかしたら助けられるかもしれませんよ？」

「「・・・・・・・・・・は？」」

「あの魔法による影響で魔力消失現象が起こることによるオスティア崩落を防ぐために急いでいるんですよね？だったら魔力消失現象

を緩和させられたらどうですか？」

「待て待て！そんな事出来るのか！？」

「え？出来ますよ・・・？」

「ちょっと待て！それは危険ではないのか？」

いきなりアリカ姫に肩を掴まれ聞かれた。

「それに・・・魔力消失現象を緩和させられるとはどういうことじゃ！？」

「ちょ、落ち着いてください陛下！」

「・・・・・・・・？」

ハア、ハアと荒く息をついていたアリカ姫は次第に落ち着いたのか話しはじめた。

「先程、魔力消失現象を緩和できると言ったがどうやるのだ？」

なんだ？目が少し怖い。

「僕がオスティアの真下に行き僕の魔力と貯めてた魔力を消失した分だけ補給するんですよ。」

「なっ！？」

「それで、魔力消失現象は緩和しますけど・・・オスティアはゆっ

くりと落ちるでしょう。」

「そうか落ちるのは仕方がない・・・私たちが市民を誘導させる間だけでいい・・・頼めるか？」

「わかりました。魔力減衰現象の緩和くらいなら三日ほど出来ます。だけど急いで下さいね？」

「了解じゃ。ガトウ！聞いていた通りじゃ！できるだけ早く安全に救出するのじゃ！！」

「わかりました！！」

そんなこんな僕はオスティアの下でお茶をしながら魔力を開放して連絡が来るまで待った。

すぐに救出は終わったとは言われたけど心配だったので魔力を貯めていたうちの一つの魔力結晶（ネギの形）を地面に突き刺して少しづつ魔力を放出するようにしてアリカ様のところまで戻った。

アリカ様もガトウもへなへなして喜んで、そのあともまあ、なんやかんやで忙しく走り回った。

オスティアで・・・（後書き）

見てくれてありがとう。

復興と投獄（前書き）

100%妄想で出来ているので間違いは多いと思います。

それでも良ければ見てください。

復興と投獄

アリカ様とガトウと僕でオスティアの崩壊での人々の救出は上手く
いって死者はゼロだった。

しかし、負傷者はそれなりにいた。

アリカ様は民を無傷で救えなかったが、死ななくてよかったと喜んで
いた。

そして休む間もなくアリカ様は元老院に民の支援を訴えに行った。

僕は家を作ったり、畑を作ったり、人を助けたりしていた。

オスティアの難民の五割を養えるほど働いた。

事実、僕の貯金の六割は復興のために使われた。

彼らの住む場所はオスティアよりかなり離れた場所ではあるが問題
はない。

ただ食料の問題があったが、僕の長年の研究の成果（日常生活魔法）
を使えばかなり解決した。

だが、アリカ様が投獄されたという報告を受けてびっくりした。

なんでも、戦争のこととか完全なる世界のこととかで濡れ衣を笑えるくらいに被せられたらしい。

みんなはメガロメセンブリアの老害共の仕業だとか言っていた。

2年後に処刑されるらしい。

アリカ様が奴隷公認法とかいう法律を決定したこともあって、民心はアリカ様を憎むほうに傾いているみたい。

まあ、あれは奴隷とは言っても過度の暴力とか危険な扱いは禁止されてるし最低限の人権もあるので、実質のところ借金形になってしまったお手伝いさんと言うようなものなんだけど。

この奴隷公認法も各国にすさまじい数の難民の受け入れを認めさせるために必要なもので、さらに奴隷の扱いについて奴隷とは言えないほどの条件で正式に条約まで結ぶことに成功したアリカ様はなかなかやり手だとアルが言っていた。

まあ、実際奴隷になった人からすればそんなもん知ったこっちゃないんだろう。

あつ、でも僕が作った村？というか街に四割のオスティア難民は住んでるよ。

ただは申し訳ないということで三月に一度だけ税金を集めてくれるとか。

別にいいんだけど・・・。

アリカ様の投獄は世界中に渦巻くやり場の無い憎しみに対する生贄とかアルが言っていた。

どうせナギはアリカ様を救って告白するんじゃないだろうか？その時まで僕は出来ることをしよう。

「おねえちゃん？どうしたの？」

「うん？なんでもないよ・・・僕男だからね？」

「うそだー。だって赤き翼の舞姫って月刊魔法新聞にかいてたよ？」

「うん・・・もういいや。」

「あきらめがかんじんだよ？」

そんな会話をオスティアの人たちとしながらこれから先どうしようか考えてました。

とりあえず、一段落ついたから王様に報酬としてテオを貰いに行かなくちゃ。

復興と投獄（後書き）

次はどうしようかな？

ギャグが全く足りない・・・

エロも全く足りない・・・

ということで、はっちゃけていきます。

マオの性格が黒くなるかも。

まあ、やれるだけやってみます。

救出とこれから（前書き）

・・・クルトとタカミチ出たの初めてじゃないかな？

いやっ！？忘れてたわけじゃないよ！？

ただ書いてなかったただだから！？

まあ、どうぞ見てやってください。

救出とこれから

帝国に行ってテオを連れて行ってよいと許可をもらった。

しかし、時どき顔を出すことと泣きながら王様に言われた。

別れが辛そうだからとしばらくの間は帝国を中心に活動をして連絡を待ちながら過ごしていた。

それから時がたち処刑当日の今日。

ガトウやアルから赤き翼の集まりを聞いて集合した。

今日の為に『紅き翼』のナギを抜いたメンバーが勢揃いだ。

まあ、勢揃いと言ってもアスナちゃん、テオ、タカミチ、クルトは少し離れた安全な場所で事の顛末を待っているけど。

そしてナギを除いた僕たちは処刑場を囲んでいる兵士に紛れ込んでアリカ様が溪谷に飛び込むのを待っている。

飛び込んだ後にアリカを助けてもこいつらは許さないかもしれないから僕たちは保険でここにいる。

それで今、何が起きているかと言うと、何か偉そうなおっさんがアリカ様の罪状を読み上げている。

ああゝ・・・早く終わってくれないかな・・・この鎧とっても臭いんだけど・・・

しかもこの全身鎧ってかなり暑いんだよ・・・

あつ、アリカ様が処刑台の上に歩かされている・・・いよいよかな？

一步一步ゆっくりと魔物がうごめく溪谷の上まで歩くアリカ様。
下からは魔物の奇声が聞こえる。

いくらこれからナギが助けるとしても、あまり気持ちのいい光景じゃないな・・・

やがて谷底へと飛ぶアリカ様。
さっきの偉そうなおっさんが少し話すと、処刑場が終わったような空気に包まれる。

「よーっし、こんなモンだろ」

あつ、ジャック。

「撮れたか？　ちゃんと撮れたか？　よおし、御苦労！」

「やれやれ・・・ラカンまだ少しタイミングが早いでしょう？」

「だってよく、アル、この鎧って蒸し暑いし、ずっと突っ立ってただけで暇だったんだよ」

「だからって計画より早く行動するな！ 失敗したらどうする！」

「あぁん？ そんなときゃ、そんなときだ詠春よお」

「お、お前達は・・・！ ジャック・ラカン！ アルビレオ・イマ
！近衛・・・なんだっけ？」

「俺は詠春だ！！」

「まあまあ、落ち着いて。」

「マオ様！？」

「そんなことより、早く録画を止めるべきじゃろう？（様？）」

「フィリウス・ゼクト！？」

皆、思う所があるのか、それぞれ言葉を発しながら姿を現す。
特に僕だけ様って・・・
まあ気にする必要はないか。

「そうですね」

「それなら俺が今やっといたから心配はいらん」

「・・・ガ、ガトウ！・・・馬鹿な！ 何故『紅き翼』がここに
いるのだ？！ それでは、まさか谷底の女王は・・・！」

「今頃ナギに助けられてんじゃないかな？」

「いかな『千の呪文の男』とはいえあの谷底から生きては・・・！」

「普通はそうでしょうけどねえ」

そう、『普通』は、ね・・・。

けど、ナギって普通かな？

というか、『紅き翼』で普通の人間が何人いる？
全員いろんな意味で普通じゃないと思う。

さて、谷底はどうなってるかな？

おう、結構深いな・・・どれどれ・・・

ふむふむ、流石はナギってとこかな？

無事お姫様を救ったみたいだ。

あとはこの場をどう収めるかだが・・・

後ろでおっさんが何かジャックと言い争いを始めてる。

ふう・・・やっぱり戦いになる訳ね・・・

戦力の差くらいちゃんと見ようよ・・・。

ジャック辺りは大暴れできて嬉しいだろうけど、僕はどちらかと言えど面倒なだけだよ？

さっさと終わらせて帰りたい・・・

数時間後。

メガロメセンブリア元老院の自慢の護衛は壊滅した。

まあ、僕を含んだ『紅き翼』のメンバーは手加減していたから死人はいないけど。

あと、ナギがアリカとのイチヤイチャにかまけて俺たちを忘れてたから、ジャックなどは治まりどころが見つからず、少しやりすぎた。アルはナギ達を気付かれないように撮影してた。

今はそれも終わり、俺たちはアリカとともに秘密基地に戻っている。

「いやー、わりい、わりい。別にわざとお前等の事を忘れてた訳じゃねえんだ」

その顔は全然反省してないな。別に期待していた訳じゃないけど。

「で、二人は結婚することになったと・・・」

「まあな！」

「う、うむ／＼／」

「はっ！ やっぱりこうなったか！ 俺は最初からこうなると思ってたぜ！」

「おめでとうございます、ナギ」

ジャックとアルが結婚の話を聞いてそれぞれの反応を返す。

「その後はどうするのじゃ？」

「そうだな・・・アリカと前に約束してた京都にでも行くか」

京都か。

京都はおろか、旧世界だって何年も行っていないな。ちょうどいいかもしれない。

「そうか。だったら僕たちも行こうかな。どう、テオ？　日本に行く？」

「行くのじゃ！旧世界の料理を味わってみたいのじゃ！」

「私も家に帰らないといけないから一緒に行こう」

詠春も一緒か。

「そう言えば、詠春。結婚するって本当？」

「はい、これから帰って式を挙げる予定です。」

終戦から二年の間、詠春は実家と『紅き翼』の時間を半々と分けていたらしい。

詠春はその間にどうやらお見合いをして新婚気分を味わっていたらしい。

結婚はしてなかったみたいなんだけど。

アリカ様の事があったから、結婚はお預けみたいなものだったらしい。

「それはよかったな。子はできそうか？」

「あはは、まだまだですよ。あと数年は夫婦だけで過ごすつもりです」

「そうか」

「取り敢えず京都に行くのは詠春、ナギたち、僕とテオとアスナちゃん？ 他の皆はどうする？」

「マオも行くし、わしはまだ日本には行った事がないからのう。」
ゼクトも行くんだ。

他の皆も頷いている。どうやら皆で京都へ行く事になりそうだな。
賑やかになりそうだ。

特にジャックが騒ぎそうだね。

花見の宴会でもあれば楽しそうだが、桜の季節に重なるか・・・

「どうやら全員行くみたいだな。詠春、青山の本家は俺たち全員を受け入れてくれると思う？」

「多分大丈夫でしょう。敷地は広いですし、開いている部屋はたくさんありますし」

「なら安心だね！ それじゃあ、ナギ。いつ出発する？」

僕が色々仕切っていたけど、最後は一応、リーダーのナギに任せる

のを忘れない。

こういう気遣いが団体行動を円滑に勧める為には欠かせないんだよ。

「たぶん俺たちがアリカを助けたのはなかった事になるはずだが、しばらくは様子を見ようと思ってる。取り敢えず一ヶ月くらいか？ほとぼりが冷めたらどっか田舎のゲートから旧世界へ行く」

「りょーかい」

一ヶ月か。久しぶりにのんびりできるねえ。

救出とこれから（後書き）

スランプ脱出？

これからマオをどうはっちゃけさせようか迷ってます。

黒くするのはいいけど・・・エロなのかギャグなのか・・・

そこに迷います。

作者の技量としては拙いものになるかもしれませんが鼻で笑いながら見てやってください。

金髪少女との出会い（前書き）

エヴァ登場！！

一番大好きなキャラですね。

金髪少女との出会い

旧世界に行くまでにみんな一カ月間のあいだに自分のしたいことをしていた。

ナギの場合は紛争地域の鎮圧と復興。

アルは月刊ロリロリの保存用・布教用・自分用を買いに本屋をはしごしているみたい。

ラカンが闘技場で金を稼ぎ、誰かのファンクラブでグッズを買いあさっているらしい。

詠春は愛しの恋人にお土産を買いまくってるみたいだ。

ゼクトとアスナちゃんはテオにファッションショーをするぞとか言われて服とかアクセサリーを買い集めている。
もちろんお金は僕が出したよ。

ガトウはアリカ様の無実を世界に教えようと情報を集めている。

タカミチ・クルトは新たな道に目覚めたり。

アリカ様はナギとの愛の巢で幸せそうに生活していたり。

僕は時どきナギの手伝いとかしながら旅をしていた。

旧世界に行くのも一週間をきった時のこと。

僕はいつものようにブラブラと森の上を蛇行しながら飛んでいるときだった。

僕は崖の近くをふらふら歩いている少女を見つけた。

あまりにもふらふらしていたので少しの間見ていた。

すると、少女が崖から足を滑らして落ちそうになった。

急いで飛んで行って抱きしめて支えた。

完全に足が崖から離れていたから危なかった……。

大丈夫か聞こうとしたら

「……お腹減った……」

と言ったので、その日は森で野宿する事にした。

僕が森で拾い集めたのや魔法球からのおすそ分けでとりあえずシチューを作った。

目覚める様子がなかったので僕は少女の顔を見ていた。

どこかで見たことがあるようなような・・・？

そうだ！昔追いかけてきた吸血鬼の女性に似てるんだ！

そう気づいた瞬間。ヒュッ

僕の後ろからナイフが飛んできた。

「だれ！？」

「ウケケケ！イマノヲサケルトハヤルナア？ゴジュジンヲカエシテモラウゼ？」

後ろから現れたのは緑の髪を持った人形。

それだけなら可愛いんだけど、その手に持った大きなナイフがそれを打ち消している。

「急に危ないじゃないか！」

「カルガルトサケタクセニヨクイウジャネエカ」

「いやいや、かなりギリギリだったから・・・そういえばご主人って誰？」

「ウケケ？ソコニイルジャネエカ？」

「んっ？この子の事？」

「アア。ソウダゼ。」

「この子倒れたんだけど、なかなか起きないんだ。」

「アチャーゴシユジンマタカ・・・ハヤクオキロヨ」

人形の少女？がそう言うのと少女がむくりと起き上った。

「茶々ゼロ遅いぞ？」

「ゴシユジンソリヤアナイゼ。」

「ふん！それでお前はいったい何者だ」

「ふふふ、とりあえずこれ食べようか？」

「／／仕方ない・・・食ってやる。」

「ゴシユジンイイノカ？」

「とりあえず今だけはやめておく。（助けてくれたみたいだしな）」

「まあまあ、とりあえず二人とも食べようよ。」

そう言って僕はシチューをついで二人に渡した。

「オレハクワナクテモイインダガ？」

「いいじゃないか？みんなで食った方が美味いんだから。」

「・・・茶々ゼロお前もくえ。」

「アイアイサー」

「じゃあ、いただきます。」

「むっ？ お前旧世界の者か？」

「そうだけど？ 早く食べてみてよ毒とか入ってないから。」

そういつて僕はシチューを飲んだ。
いい出来だ。

「こっこれは！？ うまい！！」

「ゴッ・・ゴシュジン？ ソンナウマイノカ？」

やった！

「なあ！ これほどの料理を食べたことがない！・・・お前は一体？」

「僕？ 僕はねマオっていうんだ。」

「マオ？・・・んっ？・・・お前は！！赤き翼の真央か！？」

「そうだよ。」

「・・・それは置いておこう、なぜ私を助けた？（最初に話すべきだったが空気に流されて聞けなかった無理があるが聞いておかねばなるまい。）」

「・・・今頃きくんだ・・・」

「うるさい！答えろ！」

「・・・女の子が落ちそうだったから。」

「・・・私はエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。悪の魔法使いで吸血鬼だぞ？（この私を女の子扱いした奴は500年ぶりだ・
・／／／）」

「へえー」

「なんだその返しは！？もっとこうなんかないのか！？」

「吸血鬼なんて怖くないよ？」

「なっ怖くないだと・・・？」

「エヴァンジェリンみたいな子なら恐くないよ。昔襲ってきた吸血鬼の女性に怖かったけど。」

「・・・（あれ？昔襲った吸血鬼・・・・・・・・・・私？）」

「お腹も膨れたみたいだし僕は寝るね？」

「ああっ・・・（黙っておこう）」

ボソツ「オレクウキダナ・・・」

僕はエヴァンジェリンが目覚める前に茶々ゼロっていう人形と
つか話して出発した。
みんなもう集まっているかな？

金髪幼女との出会い（後書き）

出来はいまいち。

もしかしたら書き直すかも。

ではまた次回。

えーしゅんの家到着（前書き）

まさか・・・なかなか進まない・・・。

スクナまでいこうとしたけど・・・書けなかった。

まあ、どうぞ。

えーしゅんの家到着

ゲートを何ごともなく無事に通り抜け、僕たちはついに日本に着いた。

思わず『私は帰ってきた！』したいと思ってしまったけど……。

今は京都で、少し山奥にある青山の本家に皆で向かって歩いている。

「うーんっ！ 京都の空気は美味いなあ〜！ テオもそう思うだろう？」

大きく背伸びしながら、僕は隣を歩いているテオにそう聞く。

「そうかの？ 都会のど真ん中よりは澄んでいるかもしれぬが、わらは普通に感じるぞ？ まあ、古い独特の空気を持っているのは確かじゃの」

うーむ……テオは僕ほど感動してないっぽい……やっぱり故郷の国だから感じ方が違うのか？

「マオ、ココガコキョウ？」

肩車しているアスナちゃんから質問が来る。

「うん……日本と言う意味なら確かに故郷だけど、僕は元々、違うところから来たからな。正確には違うんだ」

「チガウンダ……」

むっ、なんか少し落ち込んだ？

ここが俺の故郷じゃないから？

「でも、ここは第二の故郷と言ってもいいかも」

「エイシュンノオウチ？」

「んー、違うかな？」

「そうですか？ いつでも来てくれてかまいませんよ？」

「じゃあ今度お邪魔さしてもらおうよ。」

「きっと皆も喜びます、真央」

噂の詠春の恋人とも会ってみたいし。

きっと大和撫子を体現してるんだろうなあ。

「なあなあ、詠春。まだ着かねえのか？」

「もうすぐだ、ナギ。少し落ち着け！」

「なあなあ、詠春！」

「ええい、お前もか、ジャック！ 少しは真央を見習え！」

「えー？ でも、俺は日本人じゃねえもん」

「まあ、よいではないか、ナギ、ジャック。詠春はもうすぐじやと言っとるし。あとちよつとすれば酒も飯も食えるんじや。それまでは我慢しよう」

ゼクトに宥められ、ナギとジャックは渋々と引き下がるのを後ろから見ている。

魔法世界なら人目なんて気にせずに飛んで行けるけど、こっちじゃ気をつけないと駄目だから僕たちは歩いている。
どうやらナギとジャックはそれが気に入らないらしい。

ナギの方はゼクトと話した後にアリカに話しかけられ、イチャイチャし始めた。

リア充め。

いいもん、僕にはテオがいるもん。

僕だってリア充してやる！

自然を楽しみながらゆっくり歩くのも違った楽しみがあつていいな・
・・。

とにかく、目的地はもう目と鼻の先。

とりあえず、今日は歓迎会やらを用意していますと詠春が言っていたから今日と明日はたぶん潰れるだろう。

暇があれば神鳴流の稽古でも見せてもらおうかな？

「詠春お願いがあるんだけど・・・。」

「なんだ？真央？」

「神鳴流の稽古を見せて欲しいんだ。」

「ああ、それ位ならいいよ。というか、習ってみますか？」

「部外者が見るだけでも難しいんじゃない？」

「いえいえ、真央は私たちの仲間を戦争で殺さずに沈めた猛者として見られていて、なおかつ何故かあなたのファンが多いから大丈夫ですよ。」

「マオ？ケンヲナラウノ？」

「おや？アスナちゃんもやりたいのかい？なら技は教えられないけど基礎の剣術を試みるかい？」

「・・・ウン。ヤッテミル。」

「いいの詠春？」

呪いの所為で未だに成長の兆しを見せないが、魔力はあるし、咸卦法の素質もあるから剣術の基礎くらい教えるのはいいと思うんだけど・・・。

「ええ、この子は力を守る必要があるでしょう？だからとりあえず手段の幅を広げておいたほうが良いでしょう？」

「なんじゃ。アスナは剣を習うのかの？　なら、私もなにかするのじゃ！教えてくれぬか詠春？」

「テオドラ様ですか……。そうですね……。真央にかないますか？」

「うーん、なら僕が教えようか？とりあえず柔術とか？」

「それでいいのじゃ！ジュウジュツだったかの？してみるのじゃ！」

「……っと、そう言っている内に着いたみたいだな」

「ココ？」

道はこの先で終わりに来ていて、その向こうには青山の屋敷らしいのが見える。

「なんだか懐かしい気がするな……」

「マオ？どうしたのじゃ？」

「なんだかこの建物の香りがこう……懐かしいんだ。」

「マオの故郷も旧世界じゃったの……」

「うん、僕の家は木で出来ていたけどこんな匂いのする木じゃなかったから。」

「真央？ 入らないのですか？」

「あつ、ごめん。すぐ行く」

テオと話している間に他の人がすでに屋敷に入っらしい。
最後に残った詠春は正門の所で止まっている僕たちに声をかけてきた。

「じゃ、行こうかテオ。」

「うむっ」

えーしゅんの家到着（後書き）

次はスクナをおえて、一気に時間が飛びます。

お風呂と鬼神と別れ・・・あと金髪幼女（前書き）

OH! NO!

全部のキャラに出番をあげれない・・・。

いつもより二倍は長いです。

では、どうぞ。

お風呂と鬼神と別れ・・・あと金髪幼女

僕たちは詠春の家にお邪魔していた。

詠春はお風呂に入るといいと言ってくれたのでお言葉に甘えて入らせてもらう。

アル・ラカン・ナギ・ガトウ・タカミチ・僕でお風呂に入っていた。

「やっぱり、日本のお風呂はいいねえ・・・」

「あれ？真央は旧世界の出身とは聞いていましたが・・・日本出身なのですか？」

「いやいや、違うけど・・・第二の故郷みたいなものだよ。」

「ああ、そういうことですか。」

「マオ！なんでお前こっちに入ってるんだ！！」

「へっ？」

「そうですよ！女性はこちらですよ！！」

「別にいいじゃねえか！ナギ！タカミチ！」

「・・・もしかして女だと思ってる？」

「見たいですね・・・。」

「ラカン！お前何言ってやがるんだ！！」

「ちょっと！待った！！僕は男だ！！」

「「へっ？？？」」

「ええ、そうですよ？真央は正真証明の男性ですよ？」

「「はあ！？」」

「そうだよ！なんなら見てみる！？」

ざばあ・・・

ぶしゅーー×2

「おい！？なんで鼻血吹いてんだよ！？ラカン・タカミチ！？」

「これはこれは・・・なかなか・・・」

「ちよっ！？そんな目で見るな！！」

「おいおい、そんなことしてる場合じゃないだろう！！」

「あつガトウ・・・いたんだ？」

「・・・まあ今はいい・・・とりあえずラカンとタカミチを湯船から出そう。」

「あれ？タカミチとラカンはどうしてフラフラしてるんだ？」

「あつ詠春・・・実は風呂で鼻血を吹いたんだ。」

「・・・（ラカン・・・タカミチはわかるが・・・お前は知らなかったのか・・・）」

「まあ、いいでしょう宴会の準備が出来たので始めましょうか？」

「そうだね・・・。」

グオオオオオオオオオオオオオオオオオツツツツ！！！！！！！！！！

「ねえ・・・詠春・・・これなに？」

いやどうみても鬼神だけどね。

飯を食べてからにして欲しい。

詠春に聞いていたら。

詠春の部下？が走り込んできて「鬼神の封印がつ」ってきたから来たんだけど・・・。

正直言ってそこまで慌てる必要はないと思う。

「あれは『リヨウメンスクナノカミ』と言って千六百年前に封印された飛騨の大鬼神です。」

「それで？なんで復活しちゃったの？」

「恐らくは単に封印が限界を超えたんじゃないかと千六百年前ですし・・・もしくは此処にいるみんなの気や魔力にあてられて活性化したのかもしれない。」

「そもそもそんだけ封印してたんだから封印した術者は優秀だったんだろうな。」

「僕たちの性か・・・。」

「で、どうするの？」

「俺はやるぜ」

「私は必要なさそうなので見学で」

「封印の準備するよ」

「上からナギ、アル、詠春です。」

「ちょっと待って。」

「なんだ？」

「僕にやらせて欲しいんだ。」

「・・・まあいいか。だけど絶対倒せよ？」

「わかってるって。」

「なら行きましょう！」

「うしっ」

「「わかったよ（ました）」」

おお！めっちゃでかいなあ・・・。

強そうだけどなんかおかしいな？

ちぐはぐというか・・・動きたいけど動けないみたいなの・・・

「ぐおおおおおおお！！！！！！」

叫びながら僕に向かって手を伸ばしてきた。

でも・・・なんとなく危害を加えるような気がしなかったからそのまま掴まれてみた。

「「真央!!!!」」

「大丈夫!! なんか様子がおかしいから見てみる!」

そう言うとりあえずみんな落ち着いてくれた。

掴まれて僕は鬼神の三つの顔の前まで持ち上げられた。

鬼神の目が僕を見つめてきた。

おもむろに鬼神は僕を額に近づけた。

額の向こうに何かが見えた。

だから僕は鬼神の額に腕を突っ込んだ。

すると・・・僕の腕に何かが掴んできた。

鬼神は急に僕を放り投げた。

僕は腕を掴む何かと共に宙に投げ出された。

「マオ! 大丈夫か!!」

ナギが僕を空中で拾ってくれた。

「うん・・・とりあえずは。」

そう言いながら僕は腕の中を見た。

そこには少女が居た。

「僕はとりあえずこの娘を寝かせてくる。」

「おう! 任しとけ!! えーと 契約に従い、我に従え、高殿の王。

来れ、巨人を滅ぼす燃え立つ雷霆。百重千重と重なりて、走れよ稲

妻『千の雷』」

いつもは省略するのにここでは威力を出すためにちゃんと詠唱して

いた。

ドンツツツ！ズグワンツ！ゴロゴロゴロッ！！！

無防備だった鬼神はたった一発の全力の千の雷をくらい崩れ落ちた。

こうしてナギによってスクナ？は簡単に再封印されましたとき。
なんだか忙しい観光旅行だね・・・

スクナ封印後少しづつるんだあと僕達はそれぞれ別行動になった。
僕は旧世界で俗に言う「自宅警備員」ってやつをやっている。
時どき紛争地域とかをまわってる。

そのおかげか魔法世界からの受けは良い。

（ナギ side）

皆と別れてだいぶ経つが俺は今非常に困っている。

数ヶ月前から追っかけがいる。崖から落ちかけている少女を助けたんだが・・・。

どこで聞いたのかマオの事をしつこく聞いてくる。

どんなに逃げてもついてくる質の悪さだ。

しかもその少女がかの有名な『闇の福音』『不死の魔法使い』のエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルらしくて厄介だ。

それに「マオ・シンドウはどこにいる！」って言われてもあれから会っていないから教えたくても無理なんだが・・・そもそも現状でア

リカの独占力に引っ掛かりそうで生きた心地がしない。

うゝんなんかい案ないかな。

ぷるるるる　ぷるるるる

ん？携帯か？

「誰だ？」

着信…近衛近衛門・・・いったいいつこんな奴の番号入れた？

まあ、出てみるか。

（お主がナギ殿か？詠春殿から聞いて居たのじゃが・・・麻帆良で働く気はないかの？なくても有用な人物を用立ててはくれぬかの）

「？」

（実は昨日麻帆良は人材不足でのお・・・警備員が欲しいんじゃが・・・いなかったら仕方ないんじゃが・・・）

うお！これはチャンスじゃないか！？適当に呪いでもかけて後は爺さんやマオに任せるか。

そーいやタカミチもそろそろ麻帆良中学あたりに入学だったはず、ガトウの教育方針みたいだからな。

平和な日常も体験しとけてことか。

「おう丁度いいやつがいるぞ　ただ連れていくのにちょっと時間かかるが・・・」

（別に次の学期が始まるまでに着けばいいらしいからまだ余裕だぞ。）

「まあ最低でも一週間以内に連れてくよ」

（了解。）

プープープー

よしっ早速買でも作りますか！

＼ナギ side end＼

＼時間経過＼

別に面倒だったからじゃないよ！

＼ナギ side＼

罨は成功した。

いや・・・しすぎた。

悪くはないんだがな。

それで連れて来るのは、あのエヴァンジェリンだと伝えた。

そのことを爺さんこと近衛近右衛門に言ったところ驚いてた。

「フォッ!？」って。

執務室に入るとソファアに座って震えている金髪少女とそれをニヤニヤながら見ている爺さんがいた。

「爺さん顔が犯罪だぞ。」

「フォッ!?! いやいやわしの顔が犯罪とな!?! ひどくね?」

「おい」

ん? エヴァンジェリンか・・・無視してみよ。

「おい聞いているのかスプリングフィールド!」

「爺さんどうだ?」

「ふむ・・・ぐっじよぶじゃ!」

「無視するな!!」

ガクガク

襟首を手で掴み両足をオレの腹に当てて身体全体を使って揺らしてきた。

「こら、やめろ! 匂いがつくだろう! (アリカに気付かれたら・・・俺は・・・)」

襟を持って猫とつまむようにして身体から離す。

「なんだと! 私が臭いともいうのか!?!」

ジタバタ

手足をばたつかせている姿を見ているのは楽しいがこれ以上異性の匂いが付くと・・・ガクガクブルブル

「フオツフオツフオ」

「おいお前らこれはどういうことだ！」

「お主には麻帆良で働いてもらいたい。」

「なぜ私がそんなことをせねばならんのだ！」

「うるさいな・・・お前が三年間静かに暮らすことが出来ればマオに呪いを解呪してくれるように頼んでやるぞ？」

「くっ・・・本当だな？」

「フオフオフオということで働いてもらおうぞエヴァンジェリン？」

お風呂と鬼神と別れ・・・あと金髪幼女（後書き）

ラカン・タカミチ・アスナ・アリカ・ガトウ

こいつらの出番が殆んどない。

次はちゃんと出番をあげたいと思う。

ラカン・アリカ・ガトウにはもう無いと思うけど・・・。

みんなとの別れの詳細と自宅警備員？（前書き）

前回の説明不足を補うため書きました。

どうぞ見てやってください。

みんなとの別れの詳細と自宅警備員？

鬼神を封印した後の事。

僕らは宴会を楽しみ一日を過ごした。

それで、鬼神から出てきた少女についてなんだけど・・・。

あの少女はいわゆる核のような存在みたいだった。

降臨して使役され穢れた事により正気を失った鬼神の唯一の無垢なる部分。

それがあの少女だということが分かった。

あの子は目を覚ます気配がない。

どうやら鬼神を内から制御しようとしていて力を使い果たしたみたいだ。

起きるのはおそらく早くて一週間だろう。

まあ、それは置いておいて。

僕は今詠春に頼んだ稽古を見せてもらえることになった。

もちろんアスナちゃんやテオも一緒だよ。

なぜかゼクトとラカンもいるけど。

僕たちが神鳴流の道場に入るとどこからともなく人が一瞬で現れた。

「お疲れ様です皆さん。」

詠春がそこにいた人たちに挨拶をした。

「いえ、そちらの方は・・・もしかして・・・真央様ですか？」

「ええ、そうですよ。」

「初めまして。今日は稽古を見せてもらいに来ました。・・・いいですか？」

「トンでもありません！？いくらでも見てってください！！」

「そっそうですか・・・」

「では、アスナちゃんはあるちで綺麗なお姉さんに教えてもらおうかな？構いませんか？」

「あっ、はい・・・いいですよ。」

「それじゃ、アスナちゃんまたあとで。」

「ウン・・・またアトデ・・・」

「では真央とテオドラ様にはそこで見ていて下さい。」

「なあ、えーしゅん俺はどうすりゃいいんだ？」

「お前もそこで大人しく見ている。」

そんな感じで僕たちは詠春の家でお世話になった。

そしてなぜかアスナちゃんとテオとゼクトと僕はここに残ることに

なった。

アスナちゃんはガトウが世話を見ると言ったんだが……。
身辺の整理をするから一月ほど預かってくれとのこと。

テオは僕と一緒にいることはおかしくない。

ただ……なぜかゼクトが残った。

そして僕ら以外のみんなは世界に散って行った。

ナギはアリカ様と愛の巣を旧世界に作って暮らすらしい。

アルは麻帆良に行って何かをするらしい。

ラカン魔法世界で様々なことをするらしい。
たぶん映画製作とか？

ガトウとタカミチは仕事と修行をしながら世界を飛び回っていくと
のこと。

詠春はすぐに結婚式を盛大にしてラブラブ空間を生み出し、次期関西呪術教会の長となった。

そして僕は京都の詠春の家の近くの家を購入して自宅警備員をすることにした。

ゼクトとアスナとテオも僕が買った家で自宅警備員をしている。

お金は結構稼いでたからね。

あれから一月

「おーい、おきろー。あさだぞー」

アスナちゃんとテオとゼクトの寝ている部屋の障子を開けながら声をかける。

部屋の中を見ると、アスナちゃんは昨夜布団に寝かせた時と同じ姿で寝ていた。

夜中に動いた様子はなく、彼女は幸せそうな顔で寝息を立てている。

それとは逆にテオはすごいアクロバティックな寝相をしていた。どうやってあんな感じになったんだろう？それでもめっちゃ幸せそうな顔をしている。

ゼクトは起きてる時と違い完全に女の子と化していた。これはアルには見せられないな・・・。

「いつも思ってたけど、子供の寝顔が無垢な天使のようなのってアスナちゃんやテオやゼクトを見ると納得できるよね・・・」

めっちゃくちゃ可愛い。

思わず撫でたくなっちゃう・・・というか、すでになでてるんだけど。

おっと、ダメダメ。

早くアスナちゃんを起こしてご飯を食べて送り出す準備をしないと。

「アスナちゃん。起きる時間だよー。朝ご飯がもうできてるよ。」

「ふみゅ・・・にゅ・・・？」

うわぁ・・・めっちゃかわええ。

「起きた？」

「おはよ・・・真央・・・」

「おう、おはよう。ご飯の前に顔を洗いに行こう。」

「ん・・・」

眠そうな目を擦りながら布団から出てくるアスナちゃん。

「ごはん・・・なに？」

「今日はね、魚のフライとサラダと味噌汁だね。」

僕がそう言っていると、アスナちゃんはご機嫌そうな顔をして顔を洗いにいった。

「うっし、じゃあ行くか」

「すぴー」

あれ、もしかして動きながら寝始めた？

まあ、洗面所に着いて冷たい水で顔を洗ったら問題なく起きるだろう。

そして、ガトウがアスナちゃんを引き取りに来た。

「一カ月ぶりだね真央。」

「そうだね。」

「それで・・・アスナちゃんはどこだい？」

「ここにいるよ。」

そこには泣いているアスナちゃんがいた。

たぶん今日でお別れなのを忘れていたんだろう。

「・・・なあ・・・真央。やっぱりこのままアスナちゃんを預かってくれるかい？」

「別にかまわないよ。」

ガトウはアスナちゃんの様子を見るなりそう言った。

「わたし・・・ここにいていいの？」

「うん。どれだけでもいいよ。」

「というわけだ。すまないな真央アスナちゃんをよろしく頼む。」

アスナちゃんは素直に喜びガトウは苦笑いしていた。

その間横にいたタカミチは空気だった。

ガトウが出て行ってすぐにテオとゼクトと鬼神の少女・・・豊が起きてきた。

「のお・・・真央・・・朝ご飯は・・・？」

「マオ・・・なぜワシらを起こさなかったんじゃ？」

「・・・・・・・・・・」

「朝ご飯は魚のフライにサラダ・味噌汁だよ。起こさなかったのは気持ちよさそうに寝てたから。」

「わらわは漬物を要求する！」

「そうか・・・あっワシもいいかの？」

「・・・・・・・・・・♪」

「ふふふ、わかったから先に座って待ってて。」

そんな感じで僕らは暮らしています。

・・・あれ？

僕・・・自宅警備員じゃなくて主夫じゃない？

みんなとの別れの詳細と自宅警備員？（後書き）

ガトウとゼクトとテオに若干の出番をあげられた。

しかし・・・タカミチ空気（笑）

こんなはずじゃなかったのに・・・

鬼神の少女の詳細は今度設定集を書きます。

それではまた。

設定 鬼神の少女について（前書き）

ぐだぐだ・・・

頭がうまくはたらない・・・

すこしおかしなテンションで書いたので可笑しいかもしれませんが。

それでも良ければ見てください。

設定 鬼神の少女について

ステータスというか説明

名前…リョウメンスクナ（分離前）豊（分離後マオ命名）

容姿…髪は長くて黒く、目は薄翠をしている。胸は大きくなくつましい。背は力を使い果たしているため小さい。とても愛らしい顔立ちをしており見る人が見ればお持ち帰りしたくなる。真央との契約の指輪を敷いている。

性格…どんな生き物にも優しく厳しい。自分を穢れた身から引きずり出してくれた真央を好いている。

力…鬼の基本能力である怪力・神としての浄化の力・不死性・豊穣の祝福・解呪etc

好きなもの…清らかなる乙女・美味しいもの・睡眠・平穏・真央

嫌いなもの…悪意・穢れ・ゲスなるもの・自分を使役したニンゲン

むかしむかしに降臨し、禁忌の呪法で操られて人々を蹂躪しその血で穢れた優しき鬼神。

陰陽師から封印されている間、封印を破らぬように深き眠りについた。

しかし、強い魔力と霊力により活性化してしまい目覚めた。

鬼神は早く自分を封じられるように暴れる自分の身体を押さえつけていた。

そこにマオが現れて穢れた身から鬼神の核である部分を引き抜いた。

それにより鬼神の身体は弱体化し本当の鬼神は穢れから解放された。

弱体化したことによりナギの千の雷をくらっただけで沈んだ。

後日、鬼神の少女は真央が預かることとなり、豊と名づけられた。

目が覚めたとき真央と魂の契約をしたことにより真央が半分神になった。

そして今に至る。

設定 鬼神の少女について（後書き）

感想待ってます。

武術の理由・詠春の頼み（前書き）

真央の意識改革が急すぎて真央が黒化しそう・・・

まあ、いいか。

ではどうぞ。

武術の理由・詠春の頼み

今日は僕がテオに武術的な何かを教えることになった。

前に約束していたから、したいということだったので教えることになった。

どんなのがいいか聞くと

「自分の身を守れるのがいいのじゃ。」

ということなので柔よく剛を制すということで攻撃よりも受け流すことに視点を置くことにした。

そしたら、ゼクトとアスナちゃんと豊もしたいと言ってきた。

ゼクトは

「ワシは魔法以外はあんまり良くないのじゃ。だから旧世界で武を鍛えるのもまた一興かと。」

と、いたって普通だった。

アスナちゃんは

「わたしはまもられるだけじゃいや・・・わたしもまもりたい。」

と、うれしいことを言ってくれた。

豊は

「ちから・・・ない・・・だから・・・欲しい。」

と、失った力の代わりに欲しいらしい。

テオにはとりあえず合気を、ゼクトには柔術を、アスナちゃんには剣術を、豊には中国拳法を教えて行く事にした。

ついでに全員に気配察知と存在感の制御、そして少しずつ全員が慣れてきたらそれぞれのやっている武術を習得してもらう。

基礎を五年も積みめば間違いなく一流にはなれる。
というかする。

「時間は飛んで」

作者の技量が低いせいで鍛練中は飛ばします。

あれから数年。

僕たちは近衛詠春にあいに来ていた。
結婚して苗字が変わっていた。
ついでに話したいことがあるそうだ。

「お久しぶりですね真央、ゼクト、テオドラ様、アスナちゃん、
・
」

「おひさー。そしてこの子は豊かだよ。」

「久しぶりじゃの。」

「うむ、久しぶりじゃ。」

「やっほー」

「・・・・・・」

「豊・・・・あの鬼神の少女ですか？」

「そうだよ。少し大きくなっててわかんなかった？」

「ええ、あの時は真央よりも頭一つちいさかったですから。」

「・・・・まあ背の事は置いてこう。それで何があったの？」

「じつは・・・・娘が出来たんですよ！もう五歳になるんです！」

「「「えっ？」「」「・・・・？」」

「最近まで近衛さんの体調が思わしくなかったので伝えるのが遅く

なりました。」

「・・・そうなんだ、おめでとう詠春。」

「おめでとうなのじゃ。」

「こどもか・・・いいのう。」

「詠春の子？」

「・・・♪」

「ありがとうみんな。」

「で、それだけじゃないんだろう？」

「ええ、実は真央たちにお願いがあるんです。」

「なに？」

「私の娘・・・木乃香の遊び相手として護衛をして欲しいのです。」

「・・・遊び相手はいい、だけど護衛とはどういうことだ？」

ぼそっ 「真央・・・最近口調が荒くなってないかの？」

ぼそっ 「たしかにのう・・・それはそれでいいんじゃないが・・・」
ぼそっ 「だがそこがいい」
ぼそっ 「アスナ・・・どこでそんなことを覚えてきたのじゃ？」
ぼそっ 「いんたーねっと」

「えっ・・・ええ、実は私が急に長になったことと私の娘である木乃香がナギを超える魔力の持ち主なのですよ。だから、陰陽師の根暗共や西洋魔法使いのクソツタレどもが狙っているんです。」

「詠春・・・わかったそのお願い聞いてあげる。だけど・・・木乃香には絶対に陰陽術や魔法の存在を教えてその危険性も教えることが条件だ。」

「そっ・・・それは「平穩に暮らさせたいとかはダメだ。それ自体が未来を奪うことになるから」・・・わかりました・・・陰陽道はこちらで教えさせます。しかし魔法についてはお願いできますか？」

「いいよ、なんたってこっちにはゼクトが居るんだから。」

「うむ、任せておけ。」

「それじゃ、話もまとまりましたし木乃香に会ってください。」

「わかった。」

「・・・のう？ワシも遊び相手にならなきゃいかぬのかのう？」

「ええ、お願いします。」

「・・・まあよいか。」

そのあと詠春に連れられて僕たちは木乃香と呼ばれる一人の幼女ともう一人の幼女に出会った。

「木乃香・・・この子たちが言っていた遊び相手です。仲良くしてくださいね。」

「うちはこのえこのかってゆうねん。よろしゅうな。ほら、せつちやんも」

「うう・・・うちはさくらざきせつなです。よっよろしゅうな。」

「僕は新堂 真央よろしくね木乃香ちゃん刹那ちゃん」

「ワシはゼクトじゃ・・・よろしくたのむ。」

「わらわはテオドラじゃ！よろしくなのじゃ。」

「わたしあすなよろしく。」

「・・・豊。」

「えーと、真央ちゃん・ゼクトちゃん・テオちゃん・アスナちゃん・ゆたかちゃんてええん？」

「あってますよ木乃香。ほら、あっちで遊んできたらどうですか？」

「うんわかった！いこみんな！」

「あっ！まってこのちゃん！」

「やれやれ・・・」

自己紹介が終わり、木乃香ちゃんにちゃん付けで呼ばれ僕は男ではないと思われていたみたいだった。

ゼクトは顔を赤く染めていた。

長いことちゃん付けで呼ばれることはなかったからだろう。

まあ、何はともあれ長いことお世話になりそうだ。

武術の理由・詠春の頼み（後書き）

なんかぐだぐだ感がいなめない。

これはないだろ！

みたいなことがあれば感想をください。

読んでくれてうれしいです。

誘拐と最強の護衛（前書き）

時間があったので投稿。

次はいつになる事やら。

ではどうぞ。

誘拐と最強の護衛

木乃香と刹那と仲良くなってから時がたって事件は起きた。

木乃香が西洋魔術師にさらわれた。

しかも、西洋魔術師は陰陽師として活動していたらしい。
それだけじゃなく、そいつは侍女を脅してなりすましていたみたいだった。

そのせいで陰陽師の女性だと思い警戒していたから魔法で不意を突かれてさらわれてしまった。

僕たちは急いで木乃香を取り戻しに向かった。

「このちゃんを離せ!!」

「駄目だ! この娘には我が野望の大切な一つなのだ!」

「どんな野望かは知らないが・・・返してもらおうぞ!」

「くかかか! それはさせぬ! 怨鬼! 腐鬼!」

陰陽師としての地位は高かくはなかったと思っではいたが・・・なかなか強者だったみたいだ。

憎悪の塊のような雰囲気を纏った鬼と強大な力を元々持っていた死んだ鬼を反魂させて使役しているみたいだ。

かなり強力な式神だ。

この鬼たちを召還してすぐに逃げ出した陰陽師。
逃がすわけにはいかない！

「のお真央？ここはワシとテオドラとアスナに任せて行くといい。」

「でも！」

「いってらっしゃい。」

「気にせずぱぱと終わらしてくるのじゃ！」

「・・・わかったよ怪我しないでね。」

「まーくん・・・みんな・・・」

「行こう！せっちゃん！」

僕は刹那をともない陰陽師を追いかけ始めた。

やっと陰陽師に追いついたら儀式をしていた。

木乃香のあまりある魔力を使い何かを呼び出しているみたいだった。

「このちゃんをはなせー！」

「せっちゃん！」

その光景を刹那が見た瞬間に飛び掛かってしまった。

でもその攻撃を陰陽師は気にすることもなく立っていた。

木之香の魔力風で刹那ははじかれたからだ。

「くっ・・・」

ううおーooooooooーん！！

くうおーooooooooーん！！

どうやら召還に成功してしまったようだ・・・。

巨大な狼と黄金の毛をもった九尾の狐。

「くかかかかか！！成功じゃ！」

「このちゃんに何をした！！」

刹那が陰陽師に問いかける。

「仕方がない・・・こいつはな・・・生贄だ。この賢狼と九尾の狐を使役するためのな・・・」

「そんなことさせるか！」

僕は木乃香向けて走り抜けた。

いままでセーブしていた力を使って。
たぶん誰にも見えなかっただろう。

よかった・・・木乃香は寝ているだけのようだ。
だが・・・こんなことに木乃香を使ったことを許すわけにはいかない。

「ん！？何故じゃ！？どうしてそこにいる！？」

「なぜかって？普通にここに向かって走り抜けただけだよ？」

「くそっ！やれ！フェンリル！玉藻！」

こーん。

ぐおおお。

「なんじゃ！お前ら！？ワシじゃない！あいつらジグアナゼダナゼダアアアアー」

・・・陰陽師は呼び出されたフェンリル？と玉藻？に引き裂かれた。
あっけない最後だ・・・。

せっちゃんは今の光景を見て気絶してるし……。

まだ戦いは終わったわけじゃない。

呼び出されたこいつらが残っている。

そう思い力を体に溜めていると急に大きかった巨体を縮めて子犬サイズになったフェンリル？と玉藻？は僕の抱えている木乃香に近づいてきた。

敵意はなかったたのでそのままにしておいた。

するとフェンリル？（小）と玉藻？（小）は木乃香の指を甘く噛み血を吸っていた。

あわてて追い払うとフェンリル？（小）と玉藻？（小）と木乃香との間にパスが出来ていた。

……どうしよう……使役しちゃってるよ。

とりあえず今回の事件はあっけなく終わった。

木乃香は最強とも言えるかもしれないペットを手に入れて。

あっ、ペットというのは気が付いた木乃香が詠春にペットにしたいと言って詠春が頭を抱えながら許可したからだ。

フェンリル？（小）と玉藻？（小）はそれぞれ「フェル」「たま」と名付けられた。

意外にもすぐにみんなフェルとたまにすぐ慣れて今では詠春の家の
アイドル的存在になっている。

神のいたずら(前書き)

投稿できた。

テスト〵オワタOrz

やっちまいました。

まあ、それは置いておいて今日はこれだけです。

次は明日中にいくつか投稿しようと思っています。

神のいたずら

朝起きると・・・何故か女になっていた。

いや・・・語弊がある・・・少女になっていた。

・・・何故？

そんなことを考えても仕方がないか・・・。

とりあえずみんなが起きる前にごはんの準備をしないと。

それに今日は大事な話が詠春からあるみたいだね。

着替えなくちゃいけないんだけど・・・
いつもと勝手が違うからどうしようかな？
背が縮んでるしズボンも緩いしなあ・・・

そうだ！巫女服みたいな服を詠春からもらってたんだっけ？
それを着とけばいいかな？
よし、そうしよう。

今日はどうしようかな？

そうだな・・・今日はパンと目玉焼きとベーコン・・・パン食にしよう！

そうと決まれば目玉焼きを焼いて・・・横でベーコンをカリカリに炒めて。

野菜を水で洗ってから手で千切って・・・
焼いた目玉焼きとベーコンを皿に移して野菜を置いてテーブルへ。

あとは起こしに行くだけかな？

「おい。みんなごはんだよ。」

そう声をかけるとアスナ・ゼクト・豊・テオの順で起きてきた。

「おはよう真央。・・・？」

「おはよ・・・？」

「・・・？」

「おはようなのじゃ・・・ご飯はなんなのじゃ？」

「うーんとね。パンと目玉焼きとベーコンだよ。あと野菜。」

「わらわはごはんが良かったのじゃ。」

「こらこら、文句言わないの。」

「むー」

「ねえ・・・真央・・・？」

「うん？なにアスナ？」

「背・・・縮んでない？」

「うむ・・・ワシも気になってはいたのじゃが・・・背ではなく巫女服に・・・」

「……（コクコク）」

「そういえばそうじゃのう……何があったんじゃ？」

「どうしても言わなきゃダメかなあ？」

「「「ダメ！！」（じゃ！！）」」「」」

「さあ吐くのじゃ！なにがあったのじゃ？」

「ワシも知りたいし教えてくれぬかの？なぜいつもとは違う巫女服なのじゃ？」

「私も知りたい。」

「……（コクコク）」

「はぁ……わかったよ。喋るより見た方が速いから見てて。」

僕はそう言うと巫女服みたいな服の上の部分をはだけさせた。

ぶしゅっ！
ぶしゅー！
たたり
ぽたぽたっ

するとなぜかみんな鼻から赤い液体を垂らした。

「なっとなにをしておるのじゃ真央！？」ぽたりぽたりっ

「そういうのにはまだ早いとワシは思う・・・。」だらだらっ

「・・・／／／／」ぽたっ

「真央・・・エロい・・・だが・・・イイ！」ぽたぽたぽたっ

なぜかみんな顔を赤くしながら鼻を押さえて口々に言う。

とりあえず鼻をチツシュで拭いて布団に垂れたまるで〇〇〇の後み
たいになってるのをシミになる前に洗おうか。

「シミになるから早く鼻を拭いて、そして布団を洗うかどうにかし
ないと。」

「うっうむ。ワシが魔法で取っておこう。」

ゼクトが鼻に詰め物をしてから魔法の言葉をつぶやいた。
すると布団から血が染み出して空中で一つの球体となった。
便利だな魔法。

ゼクトはそれを乾燥させてゴミ箱に捨てた。

そのあといろいろあり。

みんなが鼻に詰め物をして朝ご飯を食べたあとにまた話すことになった。

神のいたずら? いつまで続く・・・(前書き)

寝不足です。

アニメ見てたらずるずると。

まあ、どうぞ。

神のいたずら？いつまで続く・・・

ふうー。

お腹もほどほどに膨れたし話の続きをしようかな。

さっきから四人の視線が凄いし。

でも、紅茶とか用意してからでもいいよね。

「飲み物何がいい？」

「わらわは牛乳がいいのじゃ。」

「ワシは梅こぶ茶を頼む。」

「私は真央と一緒にいい。」

「・・・緑茶。」

「りょーかい。アスナは僕と同じアールグレイでいいんだね。」

こぼこぼ

かちやかちや

じよろろ

「はいどーぞ。」

「うむ、ありがとうなのじゃ。それで話の続きをいいかの？」

「そうじゃな・・・次はちゃんと口での。」

「早く早く。」

「・・・（コクコク）」

「わかったよ・・・今日僕がね朝起きた時に身体に違和感を覚えたんだ。」

「違和感？」

「うん。それでね・・・寝巻を脱いで体を見るとね・・・胸があったんだ。」

「胸？」

「そう。背もいくらか縮んでて・・・その・・・ね・・・息子が・・・無くなってたんだ。」

「息子？」

「／／／」

「???」

「・・・？」

「とりあえずかんけつに言うと女の子になった。」

「「「!」?」」「「「・・・」」」

「それでね・・服を着たんだけどダボダボで着れなかったんだ。だから詠春から貰った巫女服みたいな服を着てたんだ。」

「それは別にいいのじゃが・・・戻れるのかの？」

「たぶん・・・」

「ワシは聞いたことがないのお・・・そんな現象。」

「戻れなくても私は構わない。」

「・・・（コク）」

「まあ、今日は詠春が大事な話があるって言ってたし・・その時に聞いてみようと思ってる。」

「そうなの・・魔法でわからねば東洋の秘術に頼ってみる方がいいかもしれぬしな。」

「そういうこと。」

「それはいいのじゃが・・・詠春はこちらに来るのか？」

「長が来るのは体面としてダメだから会いに行こう。」

「まあ、それが妥当じゃな。」

「ずずーー」

「ふう・・・」

それからお茶とかを飲み終えて僕らは詠春に会いに行く支度をして出発した。

詠春の屋敷に到着。

そして詠春が現れた。

「真央！？なぜここに？私から向かうと言ったのに。」

「いやいや、一番偉い長が簡単に人の家に行くのはどうかと思ってね。」

「そうでしたか・・・お気遣いありがとうございます。」

「いや、それは別にいいんだけど・・・テオ達も連れてきちゃったんだけどいい？」

「構いませんよ。久し振りに木乃香達も会いたいと言っていましたね。」

「そっか。・・・それで話って？」

「実は・・・妻の父であるお父さんが木乃香を麻帆良に通わせたいと言ってきたんです。」

「それは・・・」

「ええ、腐った正義の味方の中に放り込めと言ってきたんです。」

「・・・」

「その方が木乃香が安全だと・・・あちらはご厚意で言ってくれてるみたいなんで無下には出来ませんし。」

「それで？」

「木乃香には最強とまでは言いませんが強力な式がついてるのですがね・・・。まあ、それは置いておいて、実は私たちのところで箱入り娘のように育てるのもどうかと妻と話し合いました・・・ですが、だからと言って未知の土地に木乃香だけ放り込むのもどうかと・・・」

「・・・つまり、僕たちにも木乃香について行って欲しいと？」

「申し訳ありませんが・・・そういうことです。」

「うーん・・・僕はいいんだけど・・・みんながどういうかだね。そろそろアスナちゃんにも僕たち以外の人もかかわって欲しいし・・・テオとゼクトにも一般人として過ごしてもらいたいし。」

「とりあえず聞いてみてからだね。」

「わかりました。よろしくお願いします。」

「よしてよ、僕たちはともだちだろ？」

「そうですね。」

もちろんその後テオ達に麻帆良に行くかどうか聞くと二つ返事で許可を得た。

「ところで真央・・・」

「うん？なに？」

「なぜ背が縮んでいるんですか？」

「うーん・・・神のいたずら？」

「なんですかそれ？」

「いつかは治ると思うしいんじゃない？」

「それは構いませんが・・・私が贈った巫女服似合ってますよ。」

「ありがとう。」

「ですが・・・ここに居る女性陣は構いませんが・・・神鳴流の女性陣にはその姿を見せては駄目です。」

「なんで？」

「今の神鳴流には数名ですが同性愛者の女性が居るんです。まあ、あの人たちは可愛いものに目がありませんから気を付けてください。今のあなたはとても愛らしい少女に見えますから。」

「そっ・・・そうなんだ・・・。」

「ええ、無いとは思いますが・・・男性にも気を付けておいた方がいいかもしれません。」

「うっ・・・うん。わかった。」

その話のあと木乃香や刹那にあったら木乃香には抱きつかれ、刹那には脱がされかけた。

そのシーンを見ていた神鳴流の人（女性）に着せ替え人形にされた。テオ達も一緒に巻き込んで。

麻帆良に行くのは早くても一月後。

神のいたずら?いつまで続く・・・(後書き)

次の投稿は夜になると思います。

麻帆良に到着（前書き）

ぐだぐだ・・・

だげど投稿。

読んでやってください。

麻帆良に到着

詠春に頼まれてから一月があつという間に過ぎ。

僕たちは麻帆良に来た。

明らかにこの麻帆良は異常だ。

科学力が明らかにおかしいことが異常でないことが異常なのだ。

確実に時代を百年は追い抜いている。

まあ、それは置いておいて。

でかいなあ・・・世界樹・・・麻帆良の一番端っこからでも見えるよ。

「のう真央？」

「なに？」

「迎えはまだかろう？」

「じいちゃんおそいなあ。」

「このちゃん・・・」

「・・・（すぴー）」

「すぐ来るよ・・・たぶん。」

五分後

「いやー待たせてごめんなさい。」

「いきなり土下座で現れられても・・・」

「こっ・・・これがジャパニーズ土下座・・・」

「いやいや、何度も見たことあるでしょうが・・・」

「ノリじゃ。」

「あのー真央さん・・・ですよね？」

「うん、そうだよ。タカミチだよね？」

「はい！そうです。・・・とりあえず学園長のところに案内します。」

「よろしく。」

「他の皆は学校を案内するから・・・こちらの先生が。」

「どうもよろしく。僕は瀬流彦と言います。」

「いつからいたんですか？」

「最初からです。」

「まあ、いいでしょう瀬流彦先生。」

「まあ、そうですね。改めてよろしく。」

「「「「「よろしく」」」」」(お願いします)()(するのじゃ)(

「「「「「

「それじゃあ、みんな・・・また後で。」

「ふおっふおっふお。お主がアノ幼女神降臨かのお？」

「・・・なぜそんな名前で呼ぶんですか？他にもあるでしょう？」

「いや・・・のう・・・高畑くんがのう・・・」

「学園長・・・僕に振らないで下さい。」

「まあ、いいでしょう。それで話とは？」

「実はのう・・・麻帆良学園の生徒としてお主をとることはチョット無理があるんじゃない。」

「それで？」

「できれば先生に・・・と言いたところじゃが・・・それは無理だろうからのう・・・喫茶店とかやってみぬか？」

「喫茶店ですか？」

「そうじゃ。場所はいいところが空いてあるのでのう。高畑くん。」

「はい。アスナちゃんや木乃香ちゃん達が通う学校の近くで立地もいいのがあります。」

「・・・いいでしょう。土地の代金はいくらですか？」

「買い取るなどせずともコチラが用意しておこう。」

「いいのですか？そのかわりにくをせよとかは受け付けませんよ？」

「かまわんのじゃ。」

「これで話は終わりですか？」

「いや、ちょっと待って下さい。」

「なんですかタカミチ？」

「あなたにも夜の警備をして貰いたいんですが・・・」

「夜の警備ねえ・・・」

「もちろん給料は出すぞい。」

「いくらでしょうか？」

「そうじゃの・・・一晩で五十万でどうじゃろう？」

「・・・いいでしょう。その仕事も受けましょう。」

「交渉成立じゃの。それでのう、急に真央殿を警備に入れると反発があるやもしれぬから・・・今晚にでも警備している者達とあって実力を見せて欲しいんじゃが・・・構わぬかのう？」

「りょーかいです。」

「それでは今晚よろしくお願いします。」

「のう高畑くん・・・真央殿はオトコではないのか？」

「わかりません・・・僕も本当の性別は知らないんです。」

「・・・あれはどう見ても少女なのじゃがのう・・・」

「世の中には不思議であふれてるんですよ。（あなたの頭みたいに・・・）」

「高畑くん・・・今変なことを考えておらぬか？」

「いえ、なんでもありませんよ。」

「そうかの？」

「ええ。」

麻帆良に到着（後書き）

いまだに真央は性別が逆です。

感想とか待ってます。

閑話 ゼクト（前書き）

一ヶ月もの間が空いてしまいました。

書き上げてはいたものの、データが全て飛ぶと言うアクシデントがあり。

やる気がなくなりシンデマシタ。

だけど、頑張って書き上げました。

変なことかあると思いますけど・・・
無視してください。

閑話 ゼクト

ワシの名はゼクトじゃ。

ナギ・スプリングフィールドの師匠にして赤き翼の一員じゃ。

ワシは赤き翼に入る気などなかったんじゃが・・ナギの魔力の大きさとその無駄の多さにイライラして教えておったらいつの間にか赤き翼の一人になっておった。

その後色々活躍してワシにも二つ名がついておった。

「赤き翼のシヨタ」「ちびっこちびっ子」「あれお持ち帰りしていい?」

特にこれらは二つ名などではない!

思わずそう雑誌に言ってしまった。

ワシ以外のメンバーは「千の呪文の男」とか「バグキャラ」とか「サムライマスター」とか「ロリコン」

とか最後の以外はましなものばかりなのに・・・。

連合軍側ではそう書かれていた。

ふと帝国側も見てみたのじゃ。

すると一人の少女が舞っている写真の下に「幼女神降臨」「舞姫」「真祖を超える神祖」とか書かれていた。

その舞っている姿を見て現実で逢えたらいいなと思っておったのじゃ。

同性ながらも惹かれたんじゃ。

そしてワシは彼女に逢った。

戦場で華やかに舞い、敵を殺さずに行動不能にしていく姿を見て思わず奥がキュンとしたのじゃ。

ただ・・・こうお尻も違う意味でキュンとなったがの・・・。

その後も戦場で会うことが幾度もあり、徐々にこう・・・胸がぽかぽかすることが出来てきたのじゃ。

そしてアリカ王女とテオドラ皇女がさらわれたと聞きナギ達が助けに行き、そこで彼女とテオドラ皇女も基地に連れて帰ってきた。彼女たちは国民を人質に取られ抵抗できなかったそうだ。

そこで彼女をじっと気づかれぬように見ていると彼女はかなりの天然の様だった。

いろいろ飛ばしていつの間にか彼女もワシらの仲間になった。

・・・これが赤き翼の変なところじゃのう・・・。

いつの間にか敵じゃった者も仲間になっていく・・・まあ、それが居心地がいいんじゃない。

ワシらは真実の敵を見つけ、倒し世界を救ったのじゃ。

話の展開が速すぎるとは思うのじゃが・・・ラカンが作ると言っていた映画を見れば詳細が誇張されてはいるがわかると思う。

そんなこんなで、ワシらは世界を救い、英雄となった。

その後の事なんじゃが・・・ワシは真央から離れるのが心苦しくてともにについて行く事にした。

じゃが、ワシは真央が男だとは知らなかったんじゃ。

そのことで起きた騒動はまた今度話そう。

それで、何が言いたいかと言うと・・・ワシは・・・真央が好きだったということじゃ。

長い時を過ごし、パートナーを作る事はないと思って人の温かみをかみしめる事は出来なかった。

じゃが、ワシと同じ悠久の時を過ごせる真央と出会い、好きになれた。

ワシは今は幸せじゃ！

閑話 ゼクト（後書き）

次の投稿はまた遅いと思います。

閑話 豊（前書き）

お久しぶりです。

豊の話ですよ！

まあ、心情なんですけどね。

豊はこんなに話しません。

・・・まあ、どうぞ。

閑話 豊

・・・我は・・・いや・・・私は豊。

今私は幸福だ。

長きに渡る忌まわしき封印と穢れを・・・
私のすべてを清めてくれた・・・彼。

力はほとんど失ってしまったけど・・・。

私は私だけの人を手に入れた。

長き時を、悠久の時を残酷な鬼として過ごし、何者からも愛される
ことのなかった私。

だけど、そんな私を穢れから切り離し、家族として扱ってくれた。
彼にはそんなことは些細なこと過ぎて気にしてないと思うけど・・・。

265

鬼としてしか存在することしか知らなかった私に彼は・・・真央は
人としての姿をくれて、名前を授けてくれた。

「豊」それは私の本質の反面を表した名前。
それ自体は嬉しかった。

だけど・・・彼は気付いているだろうか？
鬼に名を付けることの意味を・・・。

名を付けるということは姿を縛り付け、命を握るということ。

私は名に縛られた・・・けれど・・・真央ならば構わない。

これからの時を・・・真央と・・・過ごせるなら。

そのためならば・・・どんなものも恐れることは無い。

・・・真央・・・気付いているだろうか？

私はあなたに・・・どれだけ救われたかを。

体験することのできなかった人の温かさ・・・

出来ることのないと思っていた家族・・・

鬼と言う存在に出来る事のない友達と言う存在・・・

もっとも愛しい存在・・・

味わうことのなかった料理というもの・・・

平和な日々・・・

たった・・・それだけのこと。

私はあなたにどれだけの物を返せるだろうか？

ああ、私は今・・・幸せだ。

出来れば・・・この幸せが永遠に続きますよう・・・。

閑話 豊（後書き）

変な話になってるかも・・・

しかもかなり短いですし・・・

次は本編？ですよ。

投稿は今カメノ足のごとく鈍足ですが出来るだけ早く投稿できるよう頑張ります！

それでは、また。

瀬流彦が・・・憐れ（泣）（前書き）

魔法使いの秘匿の心って基準低くないだろうか？

書いてて思った。

うーん、私だけかもしれないから何とも言えないけど。

今回も割とぐだぐだですけど・・・どうぞ。

瀬流彦が・・・憐れ(泣)

とりあえず交渉が終わり僕はみんなと合流した。

「あれ？みんな・・・その子は？」

合流した時には僕らの他に金髪幼女と縛られた瀬流彦先生が居た。
瀬流彦先生？

「あっ！真央！」

「むっ？マオ？」

「真央よ・・・こやつがいきなりそこにいる瀬流彦を縛り上げたのじゃ。」

「ちよっ！ちよっ・・・なんで僕が急に縛られなきゃダメなんですか！」

「黙れ・・・変態が！こんな年端もいかない少女たちを後ろからニヤニヤとしながらついていく奴なんか縛られて当然だ！警察を呼ばれないだけましだと思え！」

「ちよっと待って！僕はニヤニヤなんかしてないよ！」

「・・・どういう状況？」

「うーんとな・・・瀬流彦？先生が学校をだいたい案内を終えてな、世界樹？の広場に行こうってことになってな・・・ついて少し経つと

こんな感じになってたんや。」

「つまり・・・わからないと。」

「そうやな。」

「のう・・・真央」

「なに？あの金髪は真央の名を聞いて反応したんじやが・・・知り合いかの？」

「・・・（コクコク）」

「うーん？確かにどこかで見たような・・・」

「真央よ・・・とりあえず話をせぬとわかるものもわからぬぞ？」

「そうだね。」

ボソツ「うち・・・空気や・・・」

ボソツ「せっちゃん・・・大丈夫や・・・うちがついとる。」

ボソツ「このちゃん・・・」

なんかせっちゃんが木乃香と話してるみたいだけどそれは置いておいて・・・

僕は金髪幼女に話しかけてみた。

「ねえ、君はなんで瀬流彦さんを縛り付けてるの？」

「聞くまでもないだろう？このロリコンの毒牙に彼女らが落ちないようにだ（あんなに血が美味しそうなやつらを不味くするわけにはいかんからな）」

「ちよっ・・・僕はロリコンなんかじゃないですよ！ちゃんと好きな人が居ます！」

「ほう・・・それは誰か言ってみろ・・・ウソは聞かんぞ。」

「ちよっ・・・なんて羞恥プレイ。」

「聞きたいなあ・・・ねえせつちゃん？」

「そやねえこのちゃん。」

「ワシも気になるのう。」

「わらわも興味シンシンじゃ。」

「・・・（ふるふる）」

「・・・勘弁してください・・・（涙）」

「まあいいだろう・・・。」

「」「」「えー」「」「」

「ありがとう・・・ホントありがとう・・・（涙）」

なに？・・・この状況・・・？

「いやーすいませんでした。いろいろ焦って泣いちゃいましたよ。
あーはははは。」

いたい地味にイタイよ・・・。

「いや、すまなかった・・・。」

「いえ、構いませんよ！どうせ・・・僕なんて・・・。」

（ねえ・・・これどうする？）

（どうも出来ぬな。）

（時がすぎるのを待つかの？）

（どうでもいいけどお腹空いた）

（あつ、うちもや）

（うちは（ぐぎゅ）／／／／／）

（空いた・・・）

（・・・ご飯にしようか？）

「瀬流彦先生、とりあえずみんながお腹空いたみたいなんで良い食事処ないですか？」

「へっ？ ああつ、ありますよ。今からだと少し早いですが行きますか？」

「お願いします。」

「なあ・・・私も一緒に行ってもいいか？」

「ん？ 構わないよ。」

それじゃ行きますか。

それから瀬流彦先生が案内してくれたのは安めの料金で量も多くて美味しい・・・

牛丼屋でした。

何人かはぶーぶー言いながら食べてたけど味付けが良かったと思う。

「さて、飯も食べ終わっただし聞きたいんだけど・・・君は誰？」

「？私を知らないのか？」

「会ったばかりの金髪少女を知ってたらそいつは逮捕ものだよ。」

「誰が幼女か――！それでもお前らより年上だ――！」

「・・・教えちゃっていいの？そんな事？」

「あっ・・・」

「別にこちら側だから問題はないんですけどね。」

「だいたい長生きならマオもゼクトも豊もじゃないかのう？」

「そうだけど・・・」

「そう言えば・・・まーちゃんにクーちゃんにゆうちゃんの年は知らんなあ。」

「言ってなかったっけ？」

「」「うん（うむ）」「」

「ワシは千は超えとるのう。」

「・・・私も・・・」

「僕は千に近いぐらいかな？」

「・・・はっ？」

「そんなことは置いておいて・・・君の名前は？」

「あっ・・・ああ、私の名は悪の魔法使いエヴァンジェリン・A・K・

マクダウエルって!?! お前等は不老不死なのか!?!」

「いや違うなあ・・・不老ではあっても不死ではないなあ。」

「ワシもおんなじじゃ。」

「私は核さえ残ってればOK」

「まーちゃんたち・・・長生きなんやね。」

「こっこのちゃん? 突っ込みどころと言うか・・・なんかちがわへん?」

「美容の秘訣はなんなんやろ?」

「あっそれは知りたいなあ・・・」

「いや!?! そんなことはどうでもいい!?! お前らの名はなんだ! 教えてろ!?!」

「ワシの名はフィリウス・ゼクト」

「私は・・・豊」

「僕は新堂真央で豊はスクナ」

「・・・・・・は?」

「それより瀬流彦先生、僕らどこで寝ればいいのか?」

「えっといいのかい？」

「少ししたら起動するでしょう。」

「なら、ホテルにでも案内しようか？」

「お願いします。」

「あっ！ちょっと待ってくれ真央さん！」

「あれは・・・高畑先生？」

「よかった・・・真央さんに喫茶店の場所に案内してなかったですから。」

「今から？」

「ええ、出来ればいいんですけど。」

「・・・別にかまわないよ。」

「先に行ってもいいんですか？」

「ワシらについて行ってもいいんじゃないが・・・」

「そうなの・・・」

「・・・（コクコク）」

「うちもかまわへんねんけどな・・・」

「うちはこのちゃんがいいなら。」

「私は構わないよ。」

「じゃあ行こうかみんな。」

「あはは・・・じゃあ、ついて来てください。」

「あつれゝ？ 僕用無しじゃ・・・」

「はっ！？ あいつらは？」

とりあえず喫茶店になる場所には着いた。
そこには築数年と言ったところの家があった。
元々が店だったのかそのまま使えそうだ。

「ここが真央さんの店になる予定です。」

瀬流彦が・・・憐れ（泣）（後書き）

中途半端で切っちゃった。

次は早めに書けるといいなあ。

原作とのズレを修正するのか、オリジナルストーリーに仕立て上げるのかで少し迷っています。

どちらがいいんでしょう？

出来れば感想で答えてくれると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2330u/>

ネギまに生まれし神祖の吸血鬼

2011年9月23日08時11分発行